

雰囲気語る

アルブレヒト・レーマン

Albrecht LEHMANN

翻訳：金城 ハウプトマン 朱美

1. 社会的コンテキストと雰囲気

20世紀の半ばを過ぎるまで、語り研究 (Erzählforschung)^{訳注1}ではテキストを蒐集し分析してきた。とりわけ19世紀に集められた民衆文学をテキストとして扱ってきた。物語る個人が話を仲介する過程で与える影響と、民衆文学の出所への影響が認識されてから、語るきっかけや状況の進行にも注目されるようになった。すでに20世紀前半には、ターゲットを絞って観察し、情報提供者に問いかけをおこなっていたことからパーソナリティーの重要性や社会的状況の動性に着目していた。勘違いしやすい概念「語りの共同体 (Erzählgemeinschaft)」^{訳注2}とか「語りの生物学 (Biologie des Erzählguts)」^{訳注3}を用いた研究に、ナラトロジー (Narratologie)^{訳注4}の二つの中心的方向性の起源が、つまり文化科学的パーソナリティー研究ならびにコンテキスト研究の起源がある。これは、研究者がまずテキストの分析に限定して、つまりテキスト分析で、語り手とそのコンテキストが全体の話に及ぼす影響を無視してきたにもかかわらず有効である。

1950年代以降、関心の対象が急激に変化した。グループ・ダイナミクスの問題提起といった極端な形式が定着していたアメリカで、テキストからコンテキストに関する研究設問が増えてきたのだ。こうしてヨーロッパの学問的伝統から発した文献学的解釈は、表舞台から退いた。ヨーロッパでほぼ独占状態であったといっても過言ではない地理歴史的方法が、研究史に残るテーマになってしまった。コンテキスト研究において、伝播に関する問題は、機能的観点に重心が移され、ほとんど扱われなくなってしまった。というのもナラトロジー的コンテキスト分析が、歴史に興味を示さなかった民族学的機能理論 [EM 8: 224頁以下]^{訳注5}から発展したからだ。歴史に興味を示さなかった理論とは、マリノフスキの機能主義理論をさし、これは文化の辺境と結びついた無文字文化圏を対象としていた。ナラトロジー研究者によるコンテキスト分析は、民族学的研究と同様、観察可能な折に発話行為を分析し、特定の話の史的あるいは内的心理の原因を探るのではなく、特殊な社会的状況における語りの機能を探求していた。

この非常に偏ったコンテキスト分析による極端な解釈は、世界を舞台とし行動する者に対して役柄を演じていると認識させる。つまり彼らは、あらゆる会話の状況で、自分のコミュニケーション能力と自分自身の行動により興味を示す事柄を戦略的に反映させている。新しいことをとっさに演技することもよくあり、言い換えればパフォーマンスをおこなうのでアクターだと認識される。ここで、ドラマツルギーの効果を社会学で提唱した人の一人、アーヴィング・ゴッフマン (Arving Goffmann) を挙げる。ゴッフマンは、彼の素晴らしい観察能力や理論の創造性でもって、

昔のヨーロッパの世界劇場の公演を現代分析のメタファーと捉えた。『みんな芝居をしているんだ (Wir alle spielen Theater)』(邦訳名『行為と演技—日常生活における自己呈示』)は、ゴッフマンの初期の著書を指し、的を射たドイツ語訳である[Goffman 1969]。

コンテキスト分析とパフォーマンス研究の素描的な紹介をするだけでは、現在取り入れられている研究方法の説明を十分におこなっているとはいえない。なぜならテキストや発話行為に関する状況を超越したテーマがあるが、パフォーマンス研究ではもう主張されていないからだ。各々が社会に関連し組織の中で生活して、つまり皆が人の前で、人と共に育ってゆく生活状況の中で暮らしながら、社会的状況を認識する。コンテキスト研究者たちにより、分析を目的としてアクターのライフヒストリーの状況を超越する関係とその歴史的意識と、社会の倫理的基盤への作用が指摘される。つまり、全人生が刻み込まれている文化的コンテキストが指摘されるのだ。学問的に受け入れられているテキストの各解釈や、ある状況の各機能的分析は、自由な個人間での現代の行為にも、規範的なシステムのコンテキストにおける立場にも適応するのか、すなわち文化に適応するのかという設問で評価されなければならない。

理論を確立する過程で、もちろん経験的帰結に欠けるが、語っているうちに露わになってくるアクターの意見や、人生の目標、反感といったものが歴史的に育っていき、原因に対する疑問がわいてくる。ある文化的コンテキストで経験した個人的な話、つまり経験談(Erfahrungsgeschichte)の分析他に、誰かが語るテキストを説明する方法はあるのだろうか。アメリカで生活しているにせよ、アフリカやヨーロッパで生活しているにせよ、誰も生きている間は、膨大な数の自分のライフヒストリーを経験し、それらがパーソナリティーを形成し、生活の上でコミュニケーションが欠かせず、常に状況が変化している。社会的経験や自分の身を持った経験は、行動条件に属する。またそこに空間の経験も加わり、自分のアパートから、町の環境あるいは自然の風景に至るまで、あらゆる変化が行動条件に属する。

しかしながら、主観的な人生経験や各々の社会的状況の次元を扱うことは、語り研究では体系的におろそかにされてきた。つまり気分あるいは雰囲気の影響([Kreul 2006] 参照)がなおざりにされてきたのだ。「生き物のすべてが、まわりの雰囲気つまり秘密に満ちた大気圏を必要とする」とニーチェは述べている。ニーチェは人類学的な表現に続く第二部の文章で、「大気圏(Dunstkreis)」という言葉を用いて、ギリシャ語で雰囲気という意味の単語を最も的を射た形のドイツ語訳にしている[Hauskeller 1995: 32-33]。これは、こんにちまで通用し、例えばメディアにおいて「大気圏」という言葉の軽蔑的な響きや副次的意味が通用することもある。

昔の行動主義者やコンテキスト・ナラティブ論者たちが自分たちの研究の基盤にしていたように、人びとが語らうという状況、つまり話を語らせるという状況は、刺激したり反応を示すことを期待する情報交換以上のものである。自然科学的なアプローチを行う心理学では、感情、気分、雰囲気、感覚やそのほかの意識内容は、潜在的な誤りの原因とされて考慮されてこなかった。ナラトロジーのコンテキスト分析は、語り手や聞き手の役割をする人を出発点とし、あるいは特別な話が語られる機会に構築される相互作用ネットワークを起点とする。雰囲気や感情の特殊性は、同時に語りのなりゆきを促すことや、あるいは邪魔をする性質があることを考慮されていないことには驚く。なぜなら日常の状況に注意を払う観察者であれば、特定の雰囲気を持つ状況の「環境の性質(Umgebungsqualität)」を抜きにして、互いに語りを提供し合うこと(Geschichtenaustausch)が自然に成り立つことが決してないことや、そもそも語るにまでに至らないということをわかっているからだ[Böhme 1995: 22]。状況の雰囲気は、我々の気分や身体の状態にも影響を及ぼす。それは興奮させることもあれば、意気消沈させることもあり、また熱

狂させたり、悲しませたりもする。状況の霧囲気は、一つの状況下でさまざまな構成要素を繋ぎ合わせる。そして我々は現在の感情をその状況へと押し込む。これを基盤として我々の周りに影響を与え、この条件下にあることを心に留める。その場にいる人すべてが感じる霧囲気は、状況の性質を形成する。つまり、霧囲気は、個々の事象を足し算したり、あるいは人と環境の関係を総和したりしたものではなく、「コンテキストを含めた全体」とみなされるのである。

霧囲気は主観的に体験される。しかし、我々がそれを系統立てて観察するのは困難であり、それにもかかわらずその効果を常に感じ続けている。霧囲気は知覚に枠組みを与える。つまり我々はその場にはたらきかける霧囲気に合わせて状況を知覚するのだ [Thibaud 2003: 293]。しかし、霧囲気は個人的なものを超えて、文化の一部をなしている。霧囲気は音や匂い、視覚的印象として経験され、あらかじめ用意されたパターン(Muster)を基準に体験されてから、これにもとづき言葉で伝達される。語り研究は、体験や語りの霧囲気の次元で、現状や出典からではなく、テキスト全体から始めることができる。というのも霧囲気はテキスト中に保存されており、とりわけ主観的な回想が再現されているテキストに保存されているからである。伝説を取り上げてみると、たそがれ時という霧囲気やあるいは昼間の森の静けさは、魔的なものがあるという霧囲気と結び付けられている。それぞれの霧囲気の質に関する叙述を、観察にもとづいて個別に行おうとすると、それは困難かもしれない。しかし、思い出話では、ありとあらゆる霧囲気が、ディテールに至るまで整然と語られているのが常である。もちろん、この経験的根拠にもとづき、霧囲気から感じ取る経験について「客観的」な印象を得られない。我々は、むしろその方法と語りの内容から、思い出された体験にある霧囲気の性質を推し量るのである。

伝記的なテキストを聞いたり読んだりすると、語り手が何十年も前の特別な状況を、その時そこに居合わせた人のことや、その周辺の空間や、その時味わった感情や気分を、まさに今「目の前」で起こったことのように、いかに強い関心を持って物語っているのかがわかる。ラジオから流れてくるあの音楽を耳にすると、ずいぶん昔にその音楽を聴いていたときに味わった感情が、ふとよみがえってくるといった具合に。このようなアンサンブルのような思い出は、通常、ライフヒストリー上、重要な状況で起こった事柄や、幸せなことあるいは危機的なことと関連している。状況が、この性質からわかる。持続可能な記憶と語られた経験の物語は、その状況に由来していて、つまり伝統的な民間伝承のテキストにも同じことがいえる。強調されていない気分の中で流れて行くものは、すべて記憶に残らない。気分は記憶と語りの基盤である。

かつて視覚が感じ取ったものだけが、思い出のコンテキストや語りのコンテキストに関わるのではなく、特に聴覚、臭覚、味覚が受け取った印象が関わってくる。インタビューのインフォーマントや日常の語り手たちは、特定の霧囲気から生じた印象や、響きや、ざわめきや匂いが再び眼前にありありと浮かぶようである体験について語る。例えば、その人の人生で後になってから重要な位置を占める人と初めて出会った時のことが記憶に残っている。それが恋愛の「初まりの状況 (Eröffnungssituation)」であったり、友情あるいは嫌悪感を抱いた初まりであったりもする。こんなふうに我々は、大学の試験や実技試験(運転免許証にまつわる話)にまつわる事柄をいろいろと思い出し、さらに人生の大きな節目で起こった出来事についても思い出す。それは自分の結婚式であったり、子どもの誕生であったり、両親の死であったりする。一方、戦争や政治的破局といった歴史的発展をコンテキストにした霧囲気も記憶に残りやすい。2001年9月11日や、ケネディー大統領の死を例に挙げてみると、記憶研究者の被調査者たちは、ケネディーの死と聞いただけで、当時どんなことが起こったのか、テーブルのどこに誰が座っていたのか、特定の誰かと何を一緒に食したのかということ、まるで絵に描いたようでありありと思ひ浮かべることがで

きた。当時何が起こり、その出来事が感情にどのような印象を与えたのか記憶に張り付いているのだ。記憶研究では確実に思い出される事柄を「核となる出来事 (Kerngeschehen)」という言葉で表現している。そして瑣末な事柄、感情の「外」にある事柄は、色褪せていく。

鮮明な思い出の中では、社会的な状況コンテキストや雰囲気に関する状況コンテキストが想起されている。思い出と鍵になる出来事について語るとき、人間も空間的環境もテーマになる。少なくとも当時の状況に関する雰囲気が、話に特徴を与えているといえ、感情的な色をつける。雰囲気に関する記憶の多くは、「客観的」に観察された瑣末な事である。太陽の光が窓越しに差し込んでいたり、台所の匂いが空気に混じっていたり、テーブルが日曜日のように配膳されていたりするといった具合にだ。しかし、こんな「ささいなこと (Bagatellen)」[Scharfe 1995] が、聞き手に物語のリアルさを与えるのである。こういった雰囲気のコンテキストがライフストーリーの中心として思い出される「目録在庫 (Inventar)」に入っている。重要な記憶のイメージは、後にライフストーリーが発展していても、変わらない点が際立ち、主観的な語りのレポーターにとどまる。この場合にも、思い出話が繰り返し語られて、内容的にも形式的にも固定化されていくことは言うまでもない。この固定化は、しかしながらこの作用に反して、想起するときと語る時には感情と雰囲気について述べられる。例えば映画あるいは造形芸術が伝える特定の雰囲気の性質が、文化的パターンとして定着することがありうる。とりわけ、語りの名人が、観衆の気分を自分の思うように操作したいがために、波乱に満ちた要素を意識的に組み込むことがありうる。

カール・ヤスパース (Karl Jaspers) は、存在の危機 [Jaspers 1971 : 229-280] として体験し、想起される出来事がとりわけ印象的に作用することを「限界状況」とよんでいる。当時支配していた雰囲気は、これとは逆に、記憶の性質や語りのドラマと称される。このことに関して著者は、ここで自らの研究成果から一例を紹介したい。我々が戦争終結時の逃走と追放に関して調査をおこなったときに、ある女性が第二次世界大戦後から何十年も経過しているにもかかわらず、赤軍兵士に強姦された、ひどい出来事までのいきさつを精確に、またその時の雰囲気についてはっきりと思い出していた。その女性は当時16歳だった。50歳になった女性として、この事件の詳細に至るまで話し、当時の味覚の記憶について報告した。「私たちはバラックの中に入りました。そこにはプリンのスープがあったのをいまだに覚えてます。それは牛乳とプリンの粉で作ったもので、分けてもらえるものを全部使って作ったものだったので、プリンじゃなくて、サラサラのプリンのスープでした。(…) 外が暗くなると、酔っ払いのロシア人たちがやって来ました」[Lehmann 1993 : 167-168] と。その後もまた強姦されるのではないかとこの女性は恐怖に悩んでいた。それを逃れるために、他の女の子たちと一緒に、ある一軒家の床下に数日間隠れていた。それは終戦前の1945年の5月、白アスパラガスが旬の時期であった。若い女性たちは毎日、ちょっと隠れ家から出てきては、庭に生えていた白アスパラガスを引き抜いてきて、それを調理して食べていた。食べた後はまた床下に隠れた。ここで語られる思い出話は、強姦の限界状況が話の中心をなしている。しかし、美味しい食事という伏線があった。「あの時初めて白アスパラガスを食べました。あれからは、その匂いがただけで、もうあのことを思い出したくなかった」と。このような発言には、過去の状況が、彼女たちに影響を与えていた雰囲気とともに再び記憶によみがえってくることがわかる。雰囲気が、本質的な構成要素あるいは語りのスイッチになっている。この女性 (語り手) が、個人的な感情、気分や空間的環境の特別さを叙述するのに、この雰囲気が必要だった。雰囲気は記憶に残り、その雰囲気は後の人生史 (ライフストーリー) のために出来事全体の印象をしっかりと記憶している。

アンドレアス・ハルトマン(Andreas Hartmann)は「味の思い出(Geschmackserinnerungen)」[Hartmann 1994]と呼ばれる食事に関する体験談や、思い出話を新聞やラジオで募集して集め、その一部を出版した。「失った時を探す」テキストには、日常の談話で耳にするような話が数多く収められている。またもやこれらの日常的な思い出話にも、尋常ではない体験や気分が反映されている。ハルトマンが出版した話は、「味の思い出」というテーマに関する単なる文学的表現の補足だとはいえない。心性史(Mentalitätsgeschichte)に関する注目すべき資料でもあるのだ。

雰囲気の意味との関連で思い出とその語りで重要なのは、ハルトマンが収集した話の中には、過去の個人的な体験を再話する際に、雰囲気を極めて詳細に思い出している話が散見されるという点である。味の体験が何年も経過すると、メモラート^{訳注6}になる。こういった話は、たいてい個々の知覚を再現して語ることはなく、視覚、臭覚、聴覚、味覚から得た印象が記憶の中で統合されて語られている。この種の統合的な思い出話は、何を当時知覚したのか、それを実際に体験した人にどのような影響を与えたのかということを読者や聴衆に伝えている。

2. 雰囲気—哲学と語り研究のはざままで

雰囲気概念ならびに雰囲気が美学的知覚に及ぼす作用について、とりわけ哲学の分野で議論がおこなわれており [Schmitz 1969, Ströker 1965, Tellenbach 1968, Böhme 1995, Hauskeller 1995]、他の学問分野の研究成果も指摘されてきた。なかでもフーベルトゥス・テレンバッハ(Hubertus Tellenbach)は、彼の中心的な著書で雰囲気が個人に及ぼす影響について言及し、特に味覚と臭覚を中心にした、その体験や思い出の意味について研究している。「我々は匂いを文で表現したり、メロディーとして再現できない。しかし、匂いは我々が思い出せば〈再現される〉。(…)過去に関する不滅の事柄が匂いに保存されている。それが雰囲気なのだ」と述べている [Tellenbach 1968: 17]。

ヘルマン・シュミッツ [Hermann Schmitz 1969: 98頁以下] は、感情に関する哲学で、雰囲気は常に「純粹」に主観的ではなく、時として超個人的経験を伝えているとする。シュミッツは超個人的な日常経験として日曜日特有の感情を挙げている。その感情とは、空気中にあるもので、風景にある典型的な雰囲気「の明るさ」である。心地よい感情とは、ここでは主体により「我が身をもって経験する」のではなく、主体と空間的環境が一緒に雰囲気にはめ込まれているのである。標準化された気分状態は、その出来事にふさわしい描写が体験している人の心に「無意識」に浮かぶ。日曜日の気分あるいは風景のもつ雰囲気といった特有の感覚は、文化的基準にならっていることは疑いもない。

シュミッツは、危機的な出来事の雰囲気を予見することにも取り組み、第一次世界大戦中に遠征先から出された手紙や日記から主要な事例を取り上げた。これらの資料では、戦いに向かう前の兵士が抱いていた特別な感情が繰り返し伝えられている。例えば、敵の攻撃の前に感じ取る雰囲気から得る印象の超主観的な類型として、「空気に何か混ざってる (Es liegt etwas in der Luft)」という文章表現を挙げている。この文は、一言一句そのままの状態、戦場からの手紙や日記の多くにみられる表現である。「嵐の前の静けさ (Ruhe vor dem Sturm)」という文でも特別な雰囲気を取り上げている。多くの兵士が戦いの前に綴った予感や「砲声による極度の緊張感 (Kanonenfiebers)」にあふれた雰囲気をふくんだ感情が、記憶に保存された状態で残っていることを示す表現である。例えば「空気に何か混ざっていることをみんなが感じとっている」というふ

うに書かれていた。

脳科学者のダニエル・シャクター (Daniel Schacter) は、第一次世界大戦中に戦争に参加したアメリカ人の心理学的研究から比較可能な結果を示している。戦慄させる戦争という事件は、ファンタジーと現実のミックスとしてフラッシュバックし、いわば「幻覚 (Vision)」を体験させた [Schacter 1999 : 334]。第二次世界大戦に参戦した兵士の思い出話でも、こうした幻覚体験といった特徴のある気分と雰囲気を出して語られている。ハンス・ヨアヒム・シュレーダー (Hans Joachim Schröder) は、ソビエト戦線に出兵したドイツ兵による人生史の語りの中で、トボスの機能分析コンテキストにおいて、「何度も繰り返される文章の経験的現象 (empirischen Phänomen wiederkehrender Sätze)」を取り上げている [Schröder 1992 : 229, Schröder 2005]。インタビューで何度も反復される、第二次世界大戦時の特殊な表現「弾丸飛び交う最前線の空気 (Die Luft war eisenhaltig)」という文により、不安に陥れられている現実と皮肉な距離を取っているだけでなく、前線がもつ典型的な印象から醸し出される雰囲気についても語っている。何年も経過しても、記憶と言葉が的を射た形で当時の気分状態を伝えている。歳を重ねるにつれて、幸い戦争結果に対する感情の克服に成功しているといえる。

第二次世界大戦中に前線に参加した経験は、比較的古い言語パターンと一致しているようだ。しかし、その一致は多くの兵士が第一次世界大戦にも参加していたからという事実だけから必ずしも判断できない。先の戦争と似たような状況で、言語形式のパターンにより、不吉な予感も兵士の間では「空気に何か混ざっている」というトボスで、意思疎通していた。「嵐の前の静けさ」型のトボスや似たような形式表現のトボスは、いわば戦争中の慣用句に属し、戦争と距離を取った「弾丸飛び交う最前線の空気」も戦争中の慣用句に数えられる。後者では、前線での体験に慣れてしまい、それが日常化してしまっていることが表わされている。

3. 夢を語ることと雰囲気

我々が見る夢のレパトリーに、恐ろしい知覚映像がある。人生で起こる驚くような出来事や幸せな出来事が、夢の中で常に幻想と現実のミックスとして思い出される。とりわけ夢で見た映像は、我々の生活の現実と我々の現実の意義に衝突した感情として印象に残る。知覚と解釈のレベルでのミックスは、覚醒状態でもある。しかし、このミックスは夢の中だと、より印象深いものとして我々に接してくるかもしれない。

民話の起源が夢であるとされることがしばしばあり、これは語り研究では当然のこととして知られている。しかし、このテーマに関する専門研究が欠如している。語りは夢に由来するのか、「夢うつ」な状態の体験が報告されているのか、あるいは「夢想」を取り扱っているのかという未解決問題を我々はどのように認識すべきなのか。夢で見た話は、メルヘンや伝説のようであり、私たちの思い出話の多くと同じく、虚構のテキストである。この性質が夢で見た話を、例えば朝食の席、職場などで、数多くの語りのコンテキストで、兄弟や、愛する人たち、学生仲間たちに語って話を交換し、簡単にお互いに共通の意味を持たせる話にし、心をつかむ話にする。夢は、もちろん日常で利用されているということ以上に、心理学では資料として重要であり、特に「素人心理学 (Laienpsychologie)」でも特別なものである。夢では誰もが「当事者 (Betroffener)」であり、二人に一人は専門家だと思っているからだ。夢を見ない人は存在しないからだ！夢で見たことを語ることで夢判断は、文化史研究の一領域をなしている。このテーマは最新の夢判断文献で

は、精神分析と秘儀(Esoterik)のはざまにあり、アクチュアルさを失っていない。

夢はプロのセラピストや素人診断者だけではなく、日常の語りや語りの研究者にとっても重要な資料である。夢は虚構的性質を持っているにもかかわらず、人生のさまざまな経験が後の人生の転換期にどれほど影響を及ぼしていくのかを伝えている。それは、夜の状況を、すなわち夢の霧囲気を今の現実に呼び起こさせる。予期せぬ危険が眠る人の気持ちにまいらせる。往々にして、同じ夢を何度もみることがある。それゆえに、何か恐ろしいことを体験した人の多くは、夢の映像がその予期せぬ危険に触れないことを望んでいる。このことは、第二次世界大戦参加者たちのライフストーリー研究によく見られる [Lehmann 1986: 159頁以下]。「彼らの戦争」に関するテレビ映画は、戦争中の戦いで恐ろしい出来事を記憶によみがえらせるだけではなく、同時に制服や鉄製ヘルメットや戦争物質やロシアの冬から出ていた霧囲気も記憶によみがえらせる。こういった映画あるいは会話が、こんにちに至るまで、30年から40年前に当時の兵士を何度も苦しませた戦争中の夢を思い出させるきっかけになりうる。夢は、状況の霧囲気という特性を超越し、ある時代を経験する方法、つまり時代の精神の再現を可能にする。

夢の話をするとき、言語的な語りのパターンだけがあらかじめ決定しているのではなく、夢に現れる比喩的な言葉も、あらかじめ文化に刻み込まれている、といったほうが正しいかもしれない。こんにち、例えば、戦争の夢の多くや、かつての週間ニュース映画や、現在放送されている戦争に関するテレビドキュメンタリー番組の映像に影響を受けた1950年代の夢の多くは、白黒だ。夢を見ることは、文化の一部としてライフストーリーのように習得が可能なのかもしれない。経験に関する話や物語分析の資料として夢を扱った場合の夢の価値 [Beradt 1981: 123]は、霧囲気を醸し出す時代のカラーの認識に基づいてのみ評価される。

4. 空間・知覚と霧囲気—モノについて

美学理論研究者のあいだでは、こんにちでも「昔の」民俗学でかつて議論された見解 [Böhme 1995: 25, 33]が折にふれて広められることがある。霧囲気とは、ある意味オーラであるとか「形態の神聖さ (Gestaltheiligkeit)」 [Schmitdt 1952] だといわれ、いわば自己を抜け出して、それらが「物質文化 (Sachkultur)」の特定のモノ、あるいは他の環境の一コマとして染みついているものであるとされる。これは、霧囲気を知覚する「嵐の前の静けさ」という表現を思い出させる。ゲルノート・ベーメ (Gernot Böhme)は、社会的準拠と「モノに宿る精神 (Dingbeseelung)」や「モノの意味 (Dingbedeutsamkeit)」 [Kramer 1940, EM 3: 674頁以下] ^{訳注7}から霧囲気が伝わるとし、言い換えると人とモノの間で霧囲気が伝わるというポジションをとった。ベーメにとって、霧囲気とは、制限されずに自由に漂っているものだと理解されず、モノや空間複合体、人あるいは社会的状況から出ているものだとされた。霧囲気は感覚的に知覚され、感覚を通じて個人の意識に入り込んでいくので、霧囲気は主観的なものといえそうだ。そして同時に霧囲気は、知覚する過程で反応が超主観的で均一であるがゆえに、常にモノにもつきまとう。「霧囲気に客体としての意味を与えるべきか、あるいは霧囲気から滲み出ている周りの世界に意味を与えるべきなのか、それとも霧囲気を体験する主体として捉えるべきなのかが、はっきりわからない」 [Böhme 1995: 22] のだ。ベーメは霧囲気的作用に関する理論の中で、ある情報の受信者や解釈者としての主体と、「書き込まれた (eingeschriebene)」メッセージの「所有者 (Besitzer)」として創出されたモノ、あるいは知覚されたモノとの違いを明確にしていけないので、まさに民俗学的物質研究の

コンテキストで注目すべきである[Heidrich 2001]。

語り研究は、観察とコモンセンスの解釈をベースにしつつ、人間の持つ漠然とした気分の性質と、モノがもつ漠然とした気分の性質が体系的に区別されていることに、誤解を招かないようにアクセントを付けなければならない。人間から出る「オーラ」は社会的行為のコンテキストとして観察される。特定の人物の反応や、その対立者の言語発言に対する他の人たちの反応、あるいは物理的な外観の反応、ジャスチャーや声[Bendix 2005]、表情、姿勢等への反応を観察する。我々は自分たちがその場に居合わせたり、言語的雰囲気の出発を通じて、これらに影響を与えている点が、ここでは重要だ。人間とモノの間の雰囲気を伝えることも、各々の状況を観察することにより確認できる。もちろん、我々はこういった解釈をおこなうプロセスについても話し合うことができる。社会的な人間とモノの対話は、経験的には考えられない。

雰囲気概念が、社会的状況、つまり社会的コンテキストに関連付けられた場合に、この概念を語りの研究で使う意味がある。モノは、とある状況で何も創り出さないことを前提にしている。1940年にカール=ジギスムント・クラマー (Karl-Sigismund Kramer) が出版した著書『ゲルマン神話におけるモノに宿る精神について (*Die Dingbeseelung in der germanischen Überlieferung*)』で、著者は次のように述べている。我々は外側からモノへ近づいていく。モノの魂はモノのなかで眠っている。なんらかの相互作用があるときだけ、その「魂」は目を覚ます。「常に人間の立場から、つまり我々が観察しているものをモノにする。モノが自分から語ることはない」[Kramer 1940: 146]と。モノは、文化的知識としての意義やメッセージにおいて、常に文化的形式を通じてのみ、つまり言語、映像や音楽を通じて、いわば人間を介さないと語らないのである。

ここで語りの研究分野だけではなく、文化科学の物質文化研究にも関わる未解決の問題がある。ラルフ・リントン(Ralph Linton)は、1945年に「物質文化 (materielle Kultur)」の分類に関し、「ここで、ときどき問題になるのは、さまざまな物体自体が文化の一部と見なされるべきなのか、あるいはそれに相応した精神的要素と見なされるべきなのか」と問うている。リントンは、実用主義的な観点からこの問いに答えている。モノは文化に分類され、文化概念の概念的な特徴とは矛盾しているとす。すなわち、文化は人間の頭の中で成立する。よって意識以外には文化ではない。モノと物質を文化の一部として受け入れるようにリントンを導いたのは、この実用主義的な根拠による。というのも「パーソナリティーの研究で、物質文化を排除することは、研究にはプラスにならずむしろマイナスになる」[Linton 1974: 34]と述べているからだ。結果的に、リントンが強調するように、子どもの頃から同居する人たちのミリューや階級特有の経験は、その人たちの周りの環境の性質によって区別されている。屋根裏部屋か邸宅で育ったのかによって「持続可能 (nachhaltig)」な帰結がある。ここで少し脱線し、民俗学の学史を紹介しておく。人類学者ラルフ・リントンの見解に注目すると、リントンは、長年民俗学でおこなわれてきた物質文化と精神文化の二元性についての議論[Heidrich 2001, König 2003]を、おもに学問政策的なモチベーションからおこなっていたことがわかる。しかし、この論争は肝心のテーマにほとんど寄与しなかった。博物館に勤務する民俗学者たちは、時代や地方、形式によってモノを分類して、展示場に置く対象物の選択や展示に関する問題に取り組んできた。家具や作業道具、服を生産し使用していた人間の「モノとの付き合い (Umgang mit Sachen)」が注目されたのは遅く、ようやく1970年代になってから注目された。

これに対して大学の学問としての民俗学は、内容的に、とりわけ組織的に見た場合、まず初めにゲルマンスティークのコンテキストから発展していった。民俗学は文献学の一分野として存在し続けた時期が長く、陰のような存在だった。オットー・ラウファー (Otto Lauffer) が大学専攻

科目民俗学の初の教授に就任し、1919年にハンブルク大学に設立されたハンブルク歴史博物館館長も兼職した。ラウファーが特に重要視していたのは、物質研究を独立した研究分野として認知させることだった。蒐集した口承文藝研究のテキストや、類似の資料に向けられた風俗習慣研究を優先すべきなのか、あるいはそれに代わるモノの分類や提示を民俗学の中心課題にするべきかという、当時アクチュアルだったこの問題は、今では理解しがたい。ある研究対象を例に挙げると、「物質文化(Sachkultur)」研究でも、対象物を選択し、蒐集し、分析してから、文章にしたり、講演をおこなったり、講演の代わりに出版したりしているという事実は、口承伝承研究であれ、物質文化の伝承研究であれ、両領域で一致していることがわかる。では、ある事柄、例えば農民の長持の詳細を決定することと、詳細に語られた民衆の話の叙事的分析は形式的にどこで区別するのか。学問は言語で示される。「〈物質的な〉モノと〈口承の〉モノ、つまり物質文化と言語を区別すると先に進まない」とギュンター・ヴィーゲルマン(Günter Wiegelmann)は述べている。さらに「言語が完全に欠如している文化領域は、存在しない」と続けている[Wiegelmann 1995: 14-15]。「ただの物質(nur Materielles)」は、人が生活する世界には存在しない[König 2003: 113]のだ。

ローベルト・ゲルンハルト(Robert Gernhardt)の対話詩は、モノと言語の関係を映し出している。この詩の最後も、問題が未解決のままで終わっている。

モノについて語る

「モノという無言の存在、
私はそれについて描写したくない。
言葉では、私はその存在を
表現できないのに、どうやってできるのか」

「言葉に詰まる

無言の存在であるモノに対して。
君はモノを描写しなくてもいいんだ
「私がそれを詩に詠むだけで十分なのか」

人間やモノあるいは空間の特別な雰囲気が語られるときに、まず感覚を通じて知覚された情報が重要になる。雰囲気は、人生史に関する経験ならびに文化的ハンディキャップを基盤にして体験され、その時代の形式に合わせて、あらゆる状況で伝えられてつくり変えられる。モノには、モノから発した、その状況を包括的に理解できる雰囲気が含まれていない。しかし、それでも目立つ対象物、文化的に特に一義的に定義された対象物は、特定の状況下ではそれが純粋にそこにあるだけであるが、一方ではその場に居合わせる人たちに強い印象を与えたり、喜ばせたり、あるいは怖がらせたりするというのも事実である。

ここで、著者が説明用に考えた例を挙げてみよう。男性3人と女性2人の合計5人の社員グループが、金曜日に仕事の後に居酒屋に行き、そこで「1週間を終わらせよう (die Woche ausklingen)」としているとしよう。こういう飲み会はオフィス文化の習慣に数えられる。このグループの横に、制服を着た警察官が入って来た。グループの一人が、今、カウンターでコーラを注文した人は、自分の家の隣の人だということに気が付いた。女性たちが買い物に行きたいからという理由で先に暇乞いした後、警察官の隣に住む人が、同僚と少し話し合った後、制服の警察官を自分たちのテーブルに来ないかと誘った。その警察官は自分の飲み物をカウンターから持つ

て来て、楽な格好をし始めた。ネクタイを緩め、上着を開けて、ピストルが刺さったベルトを外し、テーブルの端に置いた。この話はあくまでフィクションであるので、実生活で警察官は、職務規定があるがゆえにそんなことを「やらない」のをわかっているのだから、この点についてここでふれない。

ピストルがテーブルに置かれることで、これまでそこにあったくつろいだ雰囲気や即座に制御され始めることは、想像に難くない。「強い」状況は、ありきたりな評価になるが、「ある雰囲気支配していた」という表現が核心を捉えている。つまり、モノが雰囲気を支配していたのだ。おそらくアグレッシブな、あるいは不安にさせるような雰囲気が、とにかくまったく普通では感じられない雰囲気が、そのピストルから余暇を楽しむ人たちのグループに移される。この人たちはこの武器にはもちろん「魂がない(nicht beseelt)」ことも、これだけだと何も「悪くない」ということもわかっている。

ここでさらに問題になるのは、警察官ではない3人がこの物質の優越性に慣れ、このモノを無視できるようになるまで、どれだけの時間を要したのかということである。あるいは、「ピストルのことを忘れるのに3人は何杯飲まなければならなかったのか」とも質問できるだろう。しかし、雰囲気とその作用は一目瞭然である。武器が置かれたという非日常性がゆえに、平和なサラリーマン生活では、間違った状況でこのピストルを思い出す価値と、警察官という人物を思い出す価値は高いだろう。とにかくこのような状況から我々を魅了する語りが生まれる。

この警察官が昼休みに警察食堂で、居酒屋でやったようにテーブルの上にピストルを置いた場合、周りのリアクションが、はっきり違うのは言うまでもない。この種の武器は、特定の状況では、例えば戦時中だと日常文化の一部でありえることも考えられる。そうだとすると驚くという反応はほとんどないだろう。20世紀末からこんにちまでのパルチザン戦争や「ゲリラ掃討戦」にその状況が当てはまるだろう。他に、バルカン戦争や不断のアフガニスタン紛争が挙げられる。そのような戦争では、最戦線を確認できない。隣人と民族集団の戦争は、地域や近隣を、要するに日常を突切っている。

アメリカのフォークロリストで人類学者でもあるヘンリー・グラッシー (Henry Glassie) は、生活を取り巻く環境にあるモノとそれらについて物語ることの関連を問うた。「物質文化 (materielle Kultur)」の相関関係を根底にし、この問題を口承文藝研究の立場から明確に提示した。グラッシーは、モノとそのナラティブなコンテクストの切っても切れない関係を前提としていた。精神的なマスターとして文化は、モノと家屋を製造実践するように、我々の言語の文章も規制している。「文化は精神のパターンであり、センテンスや家屋をつくるようにモノも作ることができる (Cultur is pattern in mind, the ability to make things like sentences or hours.)」と述べている [Glassie 1975: 17]。

グラッシーの研究テーマは、アメリカ合衆国における歴史的家屋研究から出発している。具体的にいうと、18世紀の西バージニアにおける家屋建築実践についての研究がその始まりである。当時、特定の家屋や住居のタイプが、観察と口頭伝承をもとにして、協同の手作業で組み立てられていた。これはヨーロッパでも変わらない。建築設計図というものほとんどなく、その代わりにモノや製品、質などについて細分化された語りが存在した。こんにち知識として建築学の講義で学ぶことの多くは、かつて口伝で継承されていたことである。

グラッシーのテーゼは、細分化された外形の語りのパターンは、彼の時代には組み立て説明書として役立っていたのだろうということである。グラッシーは言語と建築文化の大部分が類似していると見た。同様のパターンは、粗造りの建築物の建築学に当てはまるだけでなく、細かい詳細部分にも、例えば装飾模様に至るまでこのことが当てはまっていた [同書: 38-40]。グラッ

シーは、地理歴史的方法や、とりわけ構造主義の痕跡を手掛かりに、建築学の組み立てと、開拓民や建築主の話し言葉を比較分析することを目的とした。グラッシーが、語りのモチーフが提供している事柄と、家屋の詳細について述べられた建築学的なモチーフで一致を確認していたのなら、彼のアナロジーと仮説は行き過ぎていたことになる。

彼は、アナロジー推論を不確かな方法論の基盤にしたことによる難しさを自覚していた。それゆえに、まるでエスノグラフィーの調査結果を感覚的に観察するように、過去の歴史的關係を具象的に叙述して、とりわけ言語をモノ化するのは不可能であることと、その危険性を指摘した。グラッシーのこのテーゼには疑問が残る。推測されたアナロジーはどこで終わるのか。モチーフかそれとも現象においてアナロジーが終わるのだろうか。グラッシーは後に、さまざまな非アメリカ文化圏における物質文化や口承文化のエスノグラフィー研究をおこない、彼の著作『物質文化 (Material Culture)』 [Glassie 1999 : 55-67] では、主体にもとづいた物質文化研究の方法論的問題点に言及している。グラッシーの物質文化と言語の關係をめぐる認識について、さらに討議する価値がある。

グラッシーによると、物質文化のあらゆる対象物は、言語によって伝達される社会的コンテクストの中に存在する。彼はトルコで個人的な女性作家がデザインし、他の女性たちと一緒に糸を結んで編みあげた絨毯を例として挙げて、物質文化の形式的パターンは、詳細に至るまで話し言葉と一致しうららうという結論を導いている。まず「マイスター (Meisterin)」が絨毯全体と飾り付けの手織り部分の構想を練る。次に、立案された対象物や個々の形や色に関する知識が、芸術家や手工業者のもとで働いている従業員に伝えられる。完成した絨毯は、このような方法で手工業工場と村の文化のナラティブなコンテクストと社会的コンテクストに存在する。この作品に関するナラティブについての補足をさらに続けると、この絨毯は大都市の商人に売られた。売り込み勧誘の後、絨毯の最初の買い手が見つかった。トルコの商人だった。ここで、まず二つのミリューの、つまり村と町の市場での知識交換プロセスがある。絨毯のクリエイターと新しい所有者ならびに消費者も、互いに個人的には面識がないが、同じ国のあるいは同じ地域の文化に由来するので、「絨毯の世界 (Teppichlandschaft)」が織りなす歴史のなかで発展してきた形式言語のパターンを理解している。さらにこの人たちは同じ母語で会話をし、その絨毯の値段にも精通している。

もしもこの絨毯が、イスタンブールのバザーを訪れたドイツ人の夫婦が所有しているモノであれば、事情が変わってくる。この一枚の絨毯がハンブルクやフライブルクで部屋の飾りになっていたり、思い出の品になっていれば、それは他の文化テクストに存在することになる。思い出の品には美的な刺激以上に、このドイツ人所有者の望みが、言い換えると日がさんさんと照る砂浜の霧囲気がそこに保存されているはずである。さらに、これがインターナショナルな独特な霧囲気を醸し出したり、その家族の洗練された趣味を象徴したりもするのだ。

この事例のコミュニケーションの最後の段階を、グラッシーは日常の消費や遺産相続にみだしている。というのも、ここで新しい話や機能が結びつくからだ。この土産物がゴミになる前に、ドイツ人家族の息子がこの絨毯を犬用の敷毛布として使うと、絨毯の経歴は極めて世俗的に終わるかもしれない。

手作りの製品であること、コミュニケーションと販売といったプロセスが、工業化された地域の端っこに追いやられてしまい、どこからこの製品が文化的かつ経済的中心地にたどり着くのかということが、グラッシーにももちろん隠されていない(同書: 77)。グラッシーがコミュニケーションといった場合、人間同士が意味を伝えるプロセスのことを指し、「モノと人の關係の総体に意

味がある。(Meaning is the sum of relations between objects and people)」と述べている。グラッシーは、売買行為や住まいにある気分や雰囲気について、特にテーマとして扱っていない。しかし、グラッシーがイスタンブールのバザーで過ごした素敵な日の記憶を保存したいがために絨毯を買うドイツ人夫婦について語ると、雰囲気が現れる。

グラッシーの例と、有給休暇を過ごす場所の雰囲気のコンテキストで一般化された観察がぴったりと合致する。非常に多くの旅行者が、グラッシーの例に登場するドイツ人夫婦のように、有給休暇を過ごす場所での独特の気分、あるいは特別なその場所の雰囲気に、例えばあの市場の光景に包み込まれたいと思っている。しかし、そのことについて自宅で印象的に語りたとは思っていない。旅行者は、南国の明るい雰囲気を北の故郷へ持ち込みたいので、土産や花瓶、絵画を購入する。こういった雰囲気の転移は、不満足に終わることが多い。いかなる場合でも雰囲気を輸出させることはできず、またハンブルクの居間にはただ単にモノが、つまり全然ぴったりとこないモノが持ち込まれる。そういった思い出の品は、物置の屋根裏部屋に消える前に、隣の部屋に何か月か床に敷かれていたり、壁にかけられているのかもしれない。最終的には蚤の市に出されてしまうだろう。

雰囲気はさまざまな状況から生まれ、生きている。雰囲気は他の場所へ移し変えることができない。南国で砂浜を見ながら、また建造物や景色、光や音楽から醸し出される雰囲気の中で飲んだ「きりっとした中辛のワイン」は美味であるが、それを車のトランクに詰めて家に持ち帰らないほうがよい。しかし、ボルドー地方といった、普段家で飲んでいるワインが生育する場所へ旅行に行った場合は除く。ギリシャのワインはギリシャで飲み、ドイツでは詩に詠むことを薦める。

雰囲気にあるものとは、住空間を知覚することやそれについて語ることに該当する。このコンテキストにおいてアーノルド・ゲーレン(Arnold Gehlen)は、現代の訪問者が「高貴に装飾された」バロック広間で示すリアクションを叙述する際に、バロックを代表する広間での雰囲気知覚の歴史的次元を指摘している[Gehlen 1977: 15]。そこで偏見にとらわれずに動く人はいない。300年前に舞台として作られた「バロックの行動形式」は、文化的にみるともはや現在の文化ではない。当惑してしまい、観光客たちは、ポケットに手を突っ込む。

建築上創り出された内部空間が伝える気分の内容は、建築と建築史の中心的な課題である。気分の内容は、雰囲気の体験やそのことについて語るコンテキストでは、観察領域にもなる。こんにちの部屋は、バロック様式の部屋とは異なり、客をもてなし、くつろげる小市民的な雰囲気を醸し出しているのかもしれない。そういう雰囲気に建築家も所有者も配慮してきた。雰囲気は、人間に知覚されるだけでなく、人間にプロデュースされるのだ。雰囲気が我々の現状の生活世界の一部であり、コモンセンスとステレオタイプに基づいて、それに見合った住民のハビトゥスにおける服装から昼食まで難なく想像できるのであれば、我々は、くつろげる雰囲気を認識し、あるいは代表する建築物の雰囲気を認識する[Schmidt-Lauber 2003: 209]。そのようなステレオタイプから、我々の日常の生き生きとした語りが生まれるのだ。200年後にそのような雰囲気が博物館で展示できるのかどうか、どのように展示できるのかは分からない。手で開けられるドアがある博物館がまだ存在するとすれば、そこでは複雑なテキストの仲介が必要になるだろう。

5. 人間

語り研究では、語りのさまざまな状況に居合わせる各人が感じとる印象や記述可能な印象につ

いて問うことが重要である。この場合、ある人から醸し出される霧囲気が問題で、ナラティブの研究家たちがテキストだけではなく、状況も分析し始めてから、肝心な問題になった。現代哲学において霧囲気の効果は話題になる前に、語り研究のほうが先にこの点を指摘していた。

リンダ・デグ(Linda Dégh)は、1960年代初頭にハンガリーでメルヘンの語りの霧囲気を観察し、記述し、分析した[Dégh 1962: 91頁以下]。その際、デグは状況の霧囲気に注目し、また個々の人間が醸し出す霧囲気の効果についても留意していた。首尾よく語る語り手の特徴が及ぼす効果を中心に据えていた。デグは、語りの巨匠や、芸術家や「語り手のマイスター (Meistererzähler)」^{訳注8}と呼ばれるべき人たちについて報告している。デグが気付いたように、彼らの多くは、かなり扱いにくい同時代の人たちであり、芸術家だった。「著名な芸術家は競争相手を黙認しない」と、後に手引書に総括している[EM 4: 338]^{訳注9}。

語りの社会的状況を、デグにとって重要なインフォーマントのひとりである、語りの芸術家ギヨルク・ウンドラシュフォルヴィ (György Andrásfalvi) の個人的な魅力を、デグは控えめに描写し報告している。「この小柄で背中の曲がった男性は、村の精神的な宝物についてだけではなく、社会関係について説明する。また物質文化に関するあらゆる質問に対し、彼から正確な情報を得ることができる。この男性は鉛筆をとり、説明したいことを描き始める。この人の才能、家族の遺産、社会的状況や身体欠点といったあらゆる要素をひっくるめて、彼のパーソナリティーが形成されている。そして、このすべてが語り手の特徴の形成に関与している」[Dégh 1962: 222]と。各々の語り手から発する「気分(Stimmung)」について、マティアス・ツェンダー(Matthias Zender)もデグの解釈と似通ったことを述べており、語り手の霧囲気が聞き手に転写すると言い表している。典型的な伝説の語り手の多くは、話を語る状況で長い間忘れていた出来事をあたかもたった今体験したかのような印象をあたえて、話をアクチュアルに構成することができる繊細な人であること[Zender 1973: 121]をツェンダーは発見した。

民俗学者のマティアス・ツェンダーと同じく、哲学者のゲオルク・ジンメル(Georg Simmel)は、気分から滲み出ている印象とさまざまな状況にいる人間から滲み出る印象について言及している[Simmel 1957: 141頁以下]。ジンメルは、ある脚注で話し言葉と書き言葉の違いを比較し、状況におけるパーソナリティーの作用について一般化することに成功している。まず語りの状況が書き記されたテキストとの比較から始めている。「トーンやジェスチャー、おおまかな関連性、パーソナリティーの印象、聴衆の気分が、話し言葉を印刷された言葉とは完全に違う意味にし、作用することがしばしばある」[Simmel 1968: 236]とする。「アクセサリーについて余談(Exkurs über den Schmuck)」において、ジンメルはさらに各々が持つ「人間が放つ放射線(Radioaktivität des Menschen)」について述べ[同書、278頁以下]、「比較的広い範囲、あるいは狭い範囲で人から放射されている意味」を観察させる。社会的なモノのパーソナリティーの次元において「身体的要素と精神的要素が絡み合い」混同している。特別な服装や目立つアクセサリーはその人が与える印象を強めて強調し、その人の「スタイル」を伝える。

ジンメルのこの一般化した観察では、「聴衆(Auditorium)」というコンテキストで人間が醸し出す霧囲気の影響が、具体的に表現されている。何年も経過してから本を執筆しているときに、フィールドワーカーであり著者であるリンダ・デグの目の前に、背中の曲がった背の低いギヨルク・ウンドラシュフォルヴィはありありと姿を現した[Dégh 1962: 222頁以下]。経験にもとづいて外見的特徴をとらえることは、人が出会うところであればどこでも実践でき、広くおこなわれていることで、欠かせないことである。外見的特徴をとらえることは、想像しうるあらゆるレベルで、我々が持つ人間に関する日常でのステレオタイプの見識をとりなしている。身体的外見、

容貌や服装からの推測は、つまり人物描写し、人物の特徴を捉えることは文学作品や日常において重要な手段になっている。こういった推測は、とりわけ参加者により語りの状況の性質が評価される場合には、構成要素として不可欠である。

とまれ、日常で人相学を観察と分類の手法として用いる者は、判断を間違うのが常である。しかし、G. ベーメが強調しているように、日常での実践で人相学の正当性に抗議するというのではなく、むしろ「パートナーに対して我々が持つ偏見をたえず確かめることに対する抵抗」[Böhme 1995: 122頁以下]である。人間に関する人相学が、ジェスチャー、身振り、服装と並んで、日常でひとりの人間から他の人間に放射している雰囲気構成要素に含まれていることを否定するのは困難である。人間の声の質も、雰囲気構成要素や語り手の置かれた状況の特別な気分に含まれていることに疑問を持つ人はいない[Kolesch/Krämer 2006]。気分(Stimmung)という言葉は声(Stimme)から派生した言葉である。レギーナ・ベンディックス(Regina Bendix)[2005]は、ジンメルとツェンダーの見解を暗示的に提示し、これまで語り研究でなおざりにされてきた状況分析^{訳注10}という視点を喚起して、声は気分を作り出すメディアだと指摘した。すなわち「声は、語りの基本前提である。絵の中の語り、印刷された語り、ジェスチャーやダンス、音楽、演劇に語りがある。しかし、口頭で語る話のメディアとして声の優位性は、著者がいる文字による語りでは、著者の声あるいは語っている人の声に隠喩的に残存する」と述べている。内容は、ナラティブな伝達過程で「語りの声」により、その受け取り方や想起が異なる。人間の聴覚作用はまぎれもなく強いので、状況の全体を「決定」しうる。有名な歌手の歌声は、音の記憶保存媒体を用いて保存されている。多くの人びとの、話し声の特徴が何十年経っても耳に残っている。たとえその声が、芸術家や政治家の声のように、音の記憶保存媒体に保存されていなくても、何度もラジオやテレビで聞かされていなくても、「声ですぐにわかる」とトーマス・ベルンハルト(Thomas Bernhard)が述べている[1979: 98]。

6. 状況—雰囲気のもたらすもの

思い出話から始めようとする人は、つまりテキストを出発点とする。このテキストが成立した過去の状況を知ろうとする人は、著者が既述したように、当時作用していた気分あるいは雰囲気存在に突き当たるのが必然的である。雰囲気を思い出すコンテキストには、人間やモノの周辺で思い出された、その場に居合わせた者やモノが属し、人手の加わったモノや自然もそこに含まれる。雰囲気をもたらし周辺の性質とは、その状況に色を与えることである。

語り研究は、この感情次元が想起の性質に作用することを早い時期に認識していた[Weiser-Aall 1937: 77]。また語り研究では、デグは個人的な感情と周辺のはざまにあるアクチュアルな状況で伝えられる雰囲気の意味をまだテーマ化していなかった。だが、リンダ・デグは、ハンガリーの調査地区で、特別な語りの状況作りのお膳立てが、メルヘン語りのグループにどのように作用するのか気が付いていた。彼女の著書『メルヘン、語り手と語りの共同体(Märchen, Erzähler und Erzählgemeinschaft)』には、調査をおこなったハンガリーの田舎の人々の間で広まっていた雰囲気意識について詳述されている[Dégh 1962: 82頁以下、91頁以下、250頁以下]。雰囲気は偶然にできるものではなく、まったくもって社会的空間の演出による所産であるのだ。

語りは、村の伝統社会では労働作業の一年のサイクルと結びついていた。農作業中にも、工業化された仕事場でも、話を互いに語り合う機会は時折あった。しかし、本来、語りがおこなわれ

るシーズンは、畑仕事のない月だった。四季が語りに影響を及ぼすことは、こんにちに至るまで観察できる。秋と冬は、モダンな大都市であっても、特別にもてなされた雰囲気と語りの雰囲気がある。オフィスで働く人は、北ドイツの大都市の寒くて暗い季節には暗い色の服ではなく明るい色の服に着替え、ワインの色も濃厚な赤に変える。「くつろぎ (Gemütlichkeit)」行動シンドローム [Schmidt-Lauber 2003] の言葉で表現されるロマンティックな気分をもたらす状況は、中央ヨーロッパではこんにちでも有効であり、若い世代にも広まっている。外が寒く暗くなると、家の中をくつろぎの場にしなければならない。ドイツのクリスマスツリーは、世界標準の文化的輸出アイテムになるように「グローバル化」を必要としない。

ハンガリーの農民や手工業者、羊飼いがメルヘンを語ると、独特の雰囲気を醸し出す。リンダ・デグは彼女の読者に、こうしたメルヘンの語りから出る雰囲気は、これまでメルヘン語りの場で広く知られている気分させるように、当事者(語り手)自身が演出したものだということを明らかにした。すなわち「タバコの煙やランプの明かりが点いたり消えたりしていると、メルヘンを受け入れるのに必要な雰囲気を作り出し」[Dégh 1962: 91]ていることになるのだ。

さらにハンガリーの語り研究は、雰囲気 드라마ツルギー的観点を研究に取りこんた。アグネス・コヴァーチュ (Agnes Kovács) [1967: 169頁以下] は、それゆえに語りの表現様式リズムを調べた。観察にもとづき、「メルヘン言葉の音楽」について、つまり聴いて真似ることで獲得された、語りの表現様式リズムについて言及している。単に繰り返された対話だけではなく、抑揚がつけられたり、時には典型的なテンポの変化を伴う躍動的なリズムや、技巧的に間をとることもこのリズムに含まれる。こういった表現様式の要素を通じて、ハンガリーの村の伝統的な世界において、たいてい10人から20人ぐらいの近所の人や親戚、友人からなる小さなグループの聞き手が、メルヘンやその言葉に魅了される。コヴァーチュは、メルヘン・プレゼンテーションの語りの芸術とそれと比較可能な形式は、当時のハンガリー以外でも観察できるだろうと推測している。こんにちのプロやセミプロのメルヘンの語り手たちは、コミュニケーションを促すような小道具、例えばロウソクや絨毯等を語りの場を形づくる道具として用いている。日常の「よい語り手」[Pöge-Alder 2000: 17] は、思い出話を披露する際に、これらの道具を使いこなしている。

リンダ・デグはメルヘン研究論考で、メルヘンが求める雰囲気についてはっきりと問題にしている。ワクワクする気持ちや真面目な話し合いの時の気持ちや、美学を享受する気持ちを生み出すような話が数多く語られていた、その理想的な雰囲気を、デグは1960年代までハンガリーの村では制度化されていた通夜に見出した。通夜は幾夜も続き、亡くなった人の家で執りおこなわれた。その通夜の状況に典型的なものとは、真面目なことが面白い話やジョーク (Witz) や、楽しい思い出に何度も繰り返し風刺されていた気分である。こういった明るい雰囲気は、悲劇的に他界していない、あるいは若くして命が奪われていない遺体のそばにあるのが普通だった。デグは、これを「通夜特有の雰囲気 (Totenhaus entsprechende Atmosphäre)」と表現している。

通夜の演出の一つに、村あるいは家族が所有する死者の書の読みあげがある。この書には、殉教者の伝説、聖書の一説や敬虔な話が含まれている。しかし、この本を読み上げるのは通夜の最初だけで、夜通し、周期的にそれ以外の話が、例えばメルヘンの語り期待される。デグは18のメルヘンを彼女の語り手から確認した。世俗的な話のなかには宗教的な内容のメルヘンや、死者の書にある話と似た話も多くみられた。沈黙するような状態が、その状況の雰囲気を優位に占め始めると、明るいシーンが、例えば笑話やジョークが、その場の緊張をときほぐすために語られることが何度もあった [Dégh 1962: 251頁以下]。

語り手は状況の崇高さや厳粛さとは距離を取っていた。「人は語る動物」(Homo narrans)は形式化できない欲求に従い、崇高さは語りの中で日常レベルへと下げられる。クルト・ランケ(Kurt Ranke)は、これを人間の基本的な欲求だと推測し、それはさまざまな民族、時代と文化の歴史において、現在に至るまで観察される欲求であるとする。「人間はこれまで背負ってきたものに長くは耐えられない」とか「秘跡は説教のようにパロディー化され、わいせつな笑劇は宗教劇を中絶し、墓石に刻まれた崇敬の念は嫌になるぐらいありきたりの銘文にちりばめられたり、叙情歌が滑稽化したり、伝説が笑話に格下げされたりする」[Ranke 1955: 41]のだ。もしある時代特有の存在論的なランケの表現様式が不快感を与えるのであれば、現代では単に「正しい談話 (richtige Rede)」の基準値だけをそこに見出し、政治的正しさ(ポリティカルコレクトネス)の言語規則に反したりアクションだと見なされるかもしれない。

リンダ・デグの語りとは類似した形式を、オットー・ブリンクマン (Otto Brinkmann) がすでに1930年代にヴェストファーレンの村で観察していた。ここでの語りは、その形式と内容において、特殊なテーマをあまり扱うことがなく、つまりある状況の特殊性や雰囲気語られることはほとんどなかった。ブリンクマンはゲルマニストのユリウス・シュヴィーテリング (Julius Schwietering) 派の概念「語りの共同体」を用いた。ここでいう共同体の典型的な状況の一つに、農民たちが畑でおこなう日曜散歩が挙げられ、その散歩には落ち着いた話や静かな語りが相応しかった。

こうした農民の畑散歩は、こんにちでは「余暇」と理解されるが、当時はそうではなかった。というのも「ライ麦の育ち具合はどうか」「牛はどうしてるのか」という具合に情報収集とコントロール機能が同時に満たされていたからだ。しかし、畑散歩は農民にとって、日曜日の雰囲気「時間のゆとり (Muße)」をもたらしていた [Brinkmann 1933: 9-10]。哲学者のヘルマン・シュミッツ (Hermann Schmitz) が同様に、時間のゆとりについて「典型的な日曜日の感情 (typische Sonntagsgefühl)」だと記している。過去へむかって語りかけると、仕事と商売についての「日常のお喋り (alltägliche Geplauder)」から、あつという間に伝統的に設定された「本来の語り (eigentliches Erzählen)」へと移行するとブリンクマンは述べている。これは雰囲氣的に調律された状況で、こんにちでもハイキングの時に観察される。しかし、シュミッツは、現代の労働生活とテレビ文化が、この種の語りの機会を激減させただろうという事実注目していない。

日常の状況を研究する人は、自宅への招待や定期的開催される茶話会や、宿屋のレストランに集うグループや、床屋で、以下のようなことを観察できる。ホストあるいはグループが「相性 (Chemie)」といったものを整えたり、調和をきちんと保ったり、可能な限り葛藤は「机の下に」隠して話題に上らないようにしたりして、雰囲気をアレンジしているのを観察できる。政治的なテーマは、そういう席では特に厄介なので、話題として望ましくない。このルールは、政治的見解が異なる人たちが同席するときに限定されず、知っている者同士の間でも通用する。著者は1970年代に村の床屋で、この明文化されていない振る舞いのルールの演出を観察し、そこでたどりついた結果をみた。「意見の相違を闘わせようという傾向はほとんど見受けられなかった。そういう方向へ向かいそうになると、すぐに話題をそらしていた。〈そう思うだけなんですよ！〉とか〈話題を変えましょう〉といった決まり文句を使っていた。この状況に陥った後は、会話が弾まなくなることが多かった。批判的な意見は、双方がひとつの意見しか持っていないという証である。一緒に文句を言うことを好むが議論を好まないため、めったに議論しない」[Lehmann 1976: 116]のである。このことについては『労働者の村の生活 (Das Leben in einem Arbeiterdorf)』に既述している。似たようなことが、都市の中産階級でも、こんにちに至るまで観察できる。政治的な話題は、

招待された席では極力避けられ、霧囲気が少なくともニュートラルに保たれる。これは、乗客の政治的志向がわからない限り有効である。

かつてのナラトロジーによる、「昔の時代」の農民の世界からなる伝統的な語りのグループに関する叙述は、その時代の農民の生活を記録している。そういった話は、典型的な状況における気分の作用について何度も指摘している。「生き生きとした話(Lebendiges Erzählen)」[Bausinger 1958]とは、人々が互いに耳を傾け、互いに言葉を交わすことである。昔にもそっけない「ただ座っているだけの人(Beisitzer)」はいて、このいたたまれない人と対をなす存在として、「語りのグループ(Erzählrunde)」のおしゃべり隊長がいた。周りを取りまとめる司会者なしで進行する日常の語りでは、トークショーや会話の闘争的な状況で、こんにちではお決まりの儀式化した決まり文句「ちょっと最後まで話させてください!」を使うのを断念している。

デグとプリンクマンは、メルヘン特有のお望みの「精神的な調整(seelische Einstellung)」である語りの気分が、語りの場でどのように霧囲気を伝えているのか叙述している。日常の語りの場面で観察される参加者が信じられないような話や粗野で高飛車な話や、普及している経験論理に反するような話にも反論もせずに受け入れる心構えがあることが、ここでいうメルヘンの気分に加えられる。誰も「客観的」に議論したがる人はいないし、真実に固執することで、その状況や、「メルヘン言葉の音楽(die Musik der Märchensprache)」や霧囲気を壊そうとしない。「メルヘンの基本法(Grundgesetz des Märchens)」として、リンダ・デグは、「嘘を語り手に気付かせないこと、真実を語っていることを誓うこと」[Dégh 1962: 92]を挙げている。メルヘンとは「美しい嘘(eine schöne Lüge)」であり、聴き手が信じたがる嘘である。デグはここで、アグネス・コヴァーチュのように、テキストや霧囲気のコンテクストにおけるメルヘンの、いわば芸術的「法則」について言及している。人類学者のコヴァーチュは、ヴァルター・A. ベーレントゾーン(Walter A. Berendsohn)の論理にもとづいて観察している。ベーレントゾーンは語りの研究者に、語りのグループ内にある典型的な気分、つまり「語りの芸術の人生サークル(Lebenskreis der Erzählkunst)」に属する霧囲気の調査を求めた[Berendsohn 1968]。各々の状況が催促している特徴に対する感性と、ハンガリーの農民の語りの文化にある口伝された経験知識として、それに付随する霧囲気に対する感性が広く伝わっていたのは明らかだ。農民たちは、観察と模倣により、霧囲気の意識を獲得していた。彼らは語りの状況を作り出す場面に遭遇すると、何をアレンジしなければならないのか、とにかくそのすべてを知っていた。

リンダ・デグの叙述と分析における問いかけは、こんにちでは、ゲルノート・ベーメが美学理論で立てた問いかけを想起させる。ベーメは、「霧囲気を作る(Machen von Atmosphären)」際に[Böhme 1995: 34頁以下]、極めて「豊かな知識の宝(außerordentlich reicher Schatz an Wissen)」とは実践知識であり、それは「美学的作業をする人たち」の間に広まっているとした。ベーメは霧囲気の構造を問うスペシャリストたちをデザイナーや広告専門家、百貨店で買い物しやすい霧囲気にする音楽の専門家たちの中に見出した。とりわけ美学的知識を劇場の書割りに見出した。ハンガリーの昔の村の世界のように、ここでも実践で実証済みの見解が「含蓄に富んだ知識」とされ、いわば状況にあったデコレーション素材を使用しているものが特に影響力が高いとされる。たいていの場合、霧囲気に関する知識は、観察や模倣によって習得される。霧囲気を生み出す際に、意図的な振る舞いが重要であり、プロの専門家の美意識へ入り込むことはほとんどない。

ベーメは霧囲気が過程を踏んで発展していく例を引き合いに出す。ベーメがグリムの伝承からメルヘンを文学的なテーマとして選んだのは偶然ではない。それはJ.H.ユング＝スティリング(J.H. Jung-Stilling)の論考「ヨリンデとヨリンデル」[EM 7: 632頁以下] 訳注11に依拠するのだら

う。このメルヘンでは、雰囲気が発生について綿密詳細に語られている。その雰囲気はやわらかく、また憂鬱な気分へと引き込み、「心配な気持ちが、徐々にずっしりとした重苦しい気持ちが濃厚になる」のだ。こういう話の構成要素が、読者や聞き手の間で気分を作り出す。そこにふさわしい雰囲気と、それに関連づけて主観的に聴く準備ができているのであれば、こういう状況下で、語り手の話を聴くと、意図的に気分が高揚する効果がある。

「語りの状況(Erzählsituation)」のコミュニケーションの前提が、計画通りに引き起こされた雰囲気を介して、意図した通りに「びったりと」当てはまると信用している人がいないことに、わざわざ言及する必要はないだろう。雰囲気は、客体化できない [Hauskeller 1995: 20] し、刺激を与える話題に追従することはないし、意図した気分を感じ取るようにと、幸い誰にも強制されることがない。また雰囲気が感情移入をもくろんでいる理性から完全に引き離されることもない。例えば、「嵐の前の静けさ」というトポスにふさわしい困難な社会状況下では、ときとして気分状況が優位になることがある。雰囲気が「支配していない」場合や、雰囲気が単になんとなく「空気に」浮かんでいるといった場合には、その効果が主観的解釈に委ねられる。

雰囲気が出来事の筋立てを決めるのではなく、記憶に残る雰囲気を「持たされている」だけであり、まさにこれが過去に体験した状況を大っぴらにしている。思い出話はそれに追従する状況を我々に伝え、その当時の状況を色付ける次元を暗示し、特徴づける [Bahrtdt 1996: 52]。この特徴の成り行きは、日常の知識のなかにある。プライベートであれ、仕事であれ、人が集う時には、いつもその雰囲気次第だということを誰もが知っている。もし政治的の会合である程度の成果が得られた場合は、すべてが「隠し立てのない雰囲気 (offene Atmosphäre)」で進化したということになる。このような気分についての描写は、こんにちの若者言葉を用いると、「折り合いがよかった (Die Chemie stimmte)」といい、仰々しくない響きになる。

日常語で化学 (Chemie) という言葉を用いたメタファーは、雰囲気を表現する際にポピュラーな名称として広まっている。このメタファーを用いた人に、ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) が挙げられる。ゲーテは「選択の類似性 (Wahlverwandtschaften)」は、ある特定の雰囲気の結果であると述べ、ある「選択の類似性」の成立を自然科学のパラダイグマから発展させた「比喩の話 (Gleichnisrede)」という形式へと展開した。薄めた硫酸と石灰岩が結合すると結合ギブスができることに絡めて、ゲーテは作品中に登場する中隊長に、この結合は芸術作品の調和を生み出すものと発言させた。とりわけ、互いに語り合ったり、話を語ったりして、これまでうまくいった状況と同じプロセスを踏むには、その手はずを整える人が関与している。シャルロットは、このことを認識していた。「存在 (人) をつなぎ合わせられるかどうか、その選択は化学者の手にかかっているの」と。

言うまでもないが、通夜といった慣習が産業国の現代文化から消えてしまった。しかし、埋葬後の会食、つまり「精進明けの飲み食い」(Fellverschaufen) という慣習は、まだ村の共同体のような組織がある、特に地方では残っている。グループや地域毎に特徴的に限定される、公の葬儀に続くプライベートな葬儀では、悲劇と滑稽のはざまにある「数々の思い出 (Erinnerungen)」がライフストーリー的な話として語られるので、葬儀はこんにちに至るまで重要な語りの機会の一つである。集まってグループになった人びとは、故人について話しながら気を落ち着かせ、歴史的な次元を伴う社会集団になる。

雰囲気は、その特別な時代の表現様式や社会的特徴を備え、それを固持する。19世紀の農民の世界で執り行われていた通夜や、青少年運動が活発だった時代のキャンプファイヤーのロマンティックや、1960年代に立ち上げられた難民の同郷会は、それぞれあらゆる変更修正を乗り越え

て、独自の方法でさまざまな状況を作り出した。19世紀の農民の世界では頻繁にあった、何日もかけて人々がうちとける機会は、こんにちではほとんどなくなり、あえて言えばカーニバルぐらいしかないのも、近代化のプロセスによる。

7. 空間と景色

a. 神話的な景色

かつての伝説研究の中で、霧囲気現象に関して一番影響を与えた研究は、ルードヴィヒ・ライストナー (Ludwig Laistner) の著書『霧の伝説 (Nebelsagen)』 [Laistner 1879, EM 9 : 261 参照] 脚注¹²である。ライストナーによると、伝説は自然現象の具体的な観察や解釈から生まれ、「山を登っていくような」霧の集まりだと述べている [Laistner 1879 : 70]。この霧は、壁のようにそびえたっている [同書 : 148]。ライストナーは、中央ヨーロッパの伝説を「郷土の伝説 (heimische Sage)」と呼び、その成立からみて、常に「郷土の自然 (heimische Natur)」 [同書 : 208] の所与性から、言い換えると自然を実際に体験したことから派生しているに違いないと述べている。彼が、経験的な立場をとるのは、自分が実際に知覚しうる現象を彼のセオリーの出发点としているからだ。そのため、この条件下では、伝説は大昔に成立したものだとは必ずしもいえない。伝説は、比較的新しい過去に生み出され、原則的には現代でも生まれうるということになる。これは、同時代の「民衆の語り (Volkserzählungen)」の蒐集者に新しいセオリーとして認識された。

風の中で生じる霧の動きにのみ起因して、あらゆる「民間に広まる (volksläufig)」霊的存在 (例えば、水の精、小びと、男の巨人や女の巨人) が生まれるとしているライストナーの単一原因論は、こんにちでは大袈裟な印象を与える。しかし、ライストナーは常に、彼の時代の自然科学に基づいて、伝説ならびに神話の成立について説明しようと試みていた。彼の解釈は、脱神話化のコンセプト、つまり解明のプログラムにもとづいていた。昔の現実の光景において、摩訶不思議なものと比較的古い現実像である神話的なものが新しいものと、つまり自然科学を組み込んだ手法で、その魔力から解放することをつねに課題としていた。

作家であり、研究者でもあるライストナーは、経験主義者としてフィールドワーカーが好んでおこなうように、自分の説明に対する主観的な発見プロセスを叙述し、『霧の伝説』の第一部とあとがきに記している。これがまたヨレス (André Jolles) が偶然に発見した点と並行していることは見過ごせない。ライストナーのパターンでは、学術テキストが扱われ、ヨレスのように珍奇な話は扱われていない。偶然に、とライストナーは述べているが、1840年の気象学の講義本を発見した。自然科学者のケムツ (Ludwig Friedrich Kämtz) は彼の講義で、中央スイス・リーギーの山塊フィールドでの霧の発生と風の影響について体系的に観察したことを報告している。この気象学者を最も魅了したのは、北風の南風に対する山頂での「争い (Kampf)」だった。「何時間もかけて、山の尾根で両極からの風の争いが繰り返される」と表現している [Laistner 1879 : 5]。気象学的現象にあまり気を払わない旅行者でさえ、この演出を驚かずに見ることはなかっただろう。自然科学者が詩的な力を用いてしたための講義には、この演出についてしっかりと書き留められていた。ケムツがここで霧囲気と呼んでいるものは、自然科学から派生した比較的古い霧囲気概念と関係していて、惑星を取り巻く空気層を指していた。ケムツの「自然の演出 (Naturschauspiel)」という描写は、しかし、観察していた景色の中で同時に霧囲気的な所与性に気付いていたということである。周囲に与えられた気分気付いていたのだ。すでに、18世紀後半に自然科学との関係

を超えていた霧囲気概念には、周囲の意義も常に含まれていた [Hauskeller 1995: 32]^{原注1}。

ライストナーはこの講義を読み、ここに民衆の語りの中で人気のあるモチーフと「奇妙に似た点 (merkwürdige Ähnlichkeit)」があることに気づき、ヨーロッパの伝説で狼がかり立てられている動きと似ていると考えた。ひとりの自然科学者が観察した語りのトランスフォーメーションを通じて、語り研究家は民衆のアナログ思考の手がかりをつかもうとした。霧と風は、神話的な狼伝説の自然的前提条件であった。したがって伝説は、その土地に住む人たちの間でとりわけ神話的に解釈されていた、現実中存在する自然現象を根拠としている [Peuckert 1965: 158]。その人たちは畑をなでる風を見ると、穀物が風にたなびく動きの中に狼がいると知覚していた。ここで狼は、アナロジーでは「風と同様に扱われる」 [Laistner 1879: 9]。春の霧が畑にかかっているならば、人びとは同じパターンにならって、そこに狼が横たわっているのを見ただろう。ライストナーの解釈は、ヴィルヘルム・マンハルトの著書『森や畑の崇拜 (Wald- und Feldkulte)』に由来していた。マンハルトは、神話的かつ気象学的解釈の兆しを繋ぎ合わせようとしていた。一方ライストナーは、むしろ狼伝説を自然科学的な解釈にとどめようとはせず、「霧と関連付け」られた他の動物や、伝説に登場する他の霧の形状を探究していた。彼は通俗的な自然理解の経験的知識として、霧は自然体験のうす気味悪いものとして数えられることを前提条件にすることができた。

ロマン派以来、霧から醸し出される霧囲気は、それを詩作するように魅了してきた。オットー・フリードリヒ・ボルノウ (Otto Friedrich Bollnow) は、文学的伝統にもとづく空間知覚に関する彼の哲学的考察の中で、孤独体験としての霧の作用を徹底的に考えた。霧が大自然の中で作用する気分あるいは霧囲気とは、夜と同じく、我々の文化では不安にさせる経験のひとつである。「やつは夜の闇に紛れて消えた (Er verschwand in Nacht und Nebel)」といった言い回しがある。目に見えないものは「つかみどころのないもの (Unfaßbare)」になり [Bollnow 1976: 219]、その輪郭を失い、「いつ出てきたのか、いつ消えたのかもわからないぐらい突然に」現れてはすぐに消える。哲学者ボルノウは、我々に孤独感や逃れえぬ感情を与える夜と霧を比較するだけでなく、霧を暗い森といった伝説やメルヘンに登場する特別な風景とも比較した。そこでは数メートル先がほとんど何も見えないし、動物の声が聞こえ、人もぼやけてしか見えないので、圧迫されたような、なじまない気分になる [Lehmann 1999: 172-173]。こうして方向性を失い、孤独体験をもたらす。記憶の中では、この経験がシンボリックな力を獲得する。これこそが我々の文化において、こんにちまで太古の経験を、つまり伝説的な経験をもたらす霧囲気である。現代映画の、例えば「ブレア・ウィッチ・プロジェクト (The Blair Witch Project)」^{訳注13}では、孤独を演出し、不安にさせるような霧囲気に頼っている。この状況的所与性は、ヨーロッパや北アメリカの語りの文化である、伝説のような体験の仕方を見ごとにかつぎ出している。

語り研究で、伝統的な話の起源について問う傾向が再び強まったようだ。なぜなら、周囲を知覚するパターンが、こんにちに至るまで語りの文化に属していることに誰も疑いを示さないからだ。語りの伝統的なパターンは、依然として現実解釈の基盤として用いられている。ナラトロジー研究者のなかでもヴィル=エーリヒ・ポイカート (Will-Erich Peuckert) は、創造的な研究者であった。ポイカートは、個々の体験と文化的基準値のはざまで行き来する「神話的意識 (mythische Bewusstsein)」思考を認めた。伝説は、不安を与える自然現象の神話的解釈から生まれ、さまざまな人生の節目を乗り越えて、個人が体験することに反作用を及ぼす。ポйкаートの典型的著書『伝説 神話的世界の誕生と反応 (Sagen. Geburt und Antwort der mythischen Welt)』 [Peuckert 1965] で、伝説的な話を生み出す体験とは、こんにちでも必ず個人が経験する体験であることを何度もくりかえし喚起している。ポイカートによると、「神話的意識の段階 (mythische

Bewusstseinssebene)」は、常に文化的経験にもとづいて作用している。ポイカートの時代に典型的だった国民文化を念頭に置いていた。最終的に話として伝承し、語り手や聞き手により感情的に加工された、つまり話の内容や文化的解釈のシェーマは、「語られて生み出されたもの (was das Erzählte erzeugte)」[同書: 49]であり、これは意識史の資料になる。

ポイカートはヘルダー (Johann Gottfried von Herder) とともに、例えば民族の伝説を用いて民族の精神的差異を浮き彫りにしようとしていたが、ポイカートの見解のディテールまでたどろうとする人は今はいない。しかし、意識史と「精神史 (Geistesgeschichte)」のコンテクストで、体系性やファンタジーの語り研究の学術的意義を見出そうとしていた語りの研究の意義には、現実性がある。ポイカートは彼の時代の他の民俗学者や語りの研究者とは異なり、風景が主体へ与える印象が民衆の語りの成立要因であると認識していた。神話的な気分を起させる風景である森について、ポイカートは以下のように述べている。「私は、〈森〉を見る。森を大量に大木が生えている場所だとは見ない。同時に、森を秘密に満ちた見知らぬ場所と見なし、私に近づいて来たり私から遠ざかったりする場所であると感じる。穀物畑を見ると、たくさん実がなった何千もの穂が目に見える。しかし、穀物が風に揺り動かされ、波上に寄りそうと、これまで畑になかったものがそこに見え、急にそれが私の近くにいて感じる」[同書: 51]。他の神話的な風景の特徴をポイカートは橋や小川、孤獨な草原の形状に見出し出している。また「神話的な風景 (mythische Landschaft)」の主観的体験を社会的あるいは文化的に定義された「神話の根拠 (mythische Grunde)」に属する人間のタイプに当てはめている。ポイカートは、現代の多くの民俗学者がそうであるように、ロマン主義者のままであった。数人の民俗学の現代の研究者と同じように、ポイカートの場合、すべてが多義的で本来は定義できないが、しかしながら「説明がついたり、説明がつかなくなったり」する「ヌミノゼな場所 (numinoser Ort)」は少し時間がたてば再び理性的に説明できるとした。理性的な人間のように「神話的直観や神話的認識を持つ人間」[同書: 55-56]は「魔法のような風景」に一本の橋を見だし、余計なものとして見たものを「他の現実へ (andere Wirklichkeit)」と移す能力を備えているとした。

我々は、前近代と近代を完全に切り離すことになってしまっている。ポイカートも、神話的思考をする人間を1960年代の現代都市には見出そうとはしなかった。しかしながら、移り変わる霧囲気の事実状況が自然知覚の説明に入れられると、神話的対理性的、あるいは現代対近現代といった二元性は、それを知覚する人や、後に結果として思い出そうとする人には古めかしいものとなる。ここで再度アンソニー・ギデنز (Anthony Giddens) を引用すると、秘密と魔力は知覚と話の世界から永久に退いてはいない [Giddens 1995: 180]。具体化され個人化した悪は、政治プロパガンダとして、とりわけ政治的社会的危機を迎える時代のマスメディアに生き続け、何百万人もの同時代の人の主体的意識の中で確かに生き続けている。アメリカ大統領のジョージ・W.ブッシュ (George W. Bush) はイラン、イラク、北朝鮮を繋ぐ「悪の枢軸 (Achse des Böses)」だと宣言した。そして第二次世界大戦の戦後期に、学术界や教会にいたるまで「サタンの帝国 (Satanreich)」[Lehmann 1993: 188-189]の現実性を、ナチズムや社会主義の解説をおこなった時と同じように世界に発信し、同時代の人々の罪の意識を軽減させようとした。

近代と前近代の意識パターンの同時性は、素人だけではなく、専門家の間にも見出された。「個別の人 (die einzelne Person)」としての経験を偏見なく考慮にいれる心構えが我々にある限り、この異なる経験レベルの同時性は、特定の主観的気分あるいは霧囲気の所与性に露見する。アンソニー・ギデنزを参照すると、この異なる経験レベルの普遍的な存在は、物語研究 (Narrativistik) における意識分析の前提とある。その前提は、以下のように風景現象の作用を顧慮に入れて考察

されなければならない。

b. 風景の雰囲気

地理学者のヘルベルト・レーマン [Herbert Lehmann 1986: 151頁以下] は、風景がもつ印象の性質を知覚するために、分析的カテゴリーとして、「風景の雰囲気 (Landschaftsatmosphäre)」という概念を導入した。レーマンはこの分析法で風景の特徴をつかもうとし、これはゲオルク・ジンメルの『風景の哲学 (*Philosophie der Landschaft*)』を出発点としていた。ジンメルは、とりたてて雰囲気の概念を用いていないが、風景の気分について言及している。そこで表現したかったことは、ヘルベルト・レーマンの風景の雰囲気についての後の叙述批判と一致する。地表の形が、観察者にとってひとつの風景になるためには、それらをまとめながら統一させる情緒的な先例が必要である。この認識のかたわら、地理学者であるW.H. リール (Wilhelm Heinrich Riehl) の風景体験の主観的側面に関する見解を、つまり「風景の目 (das landschaftliche Auge)」の画像で表現している風景体験を引き合いに出す。風景が美しいのか、あるいは拒絶するようなものなのかは、「観察者の目 (Auge des Beschauers)」にかかっている [Riehl 1873: 57頁以下]。しかし、風景の知覚を何か主体的なものとして見なすかどうか、という疑問が残る。風景自体に由来する、漠然とした印象、あるいはそれどころか何らかの要求があるのかもしれない。この問題は、先のモノの雰囲気についての考察でも浮上していた。

一方で「風景の目」は、物体や、形成物、小動物までも (山塊から小石まで) 無制限に風景としてまとめる。もう一方で、風景は空間の切り取りとして感覚的に知覚され、常に視界を制限することで、視野により定義される。視野とは、あらゆる主体的な解釈を超えた、比類ない感覚知覚の現象をさす。ヘルベルト・レーマンが、ここで定義しているのは、カテゴリーの最低限の一致として「風景意識 (Landschaftsbewußtsein)」が受け入れられることであり、オーストリアの村ヴァークラインを見渡すような、パノラマの眺めが例に挙げられる。風景の空間とは、「それぞれの視界で形を構成して固定されること」である。こんにちまで、いわばプロレマイオスの世界像がそこからできている。こうしてノルベルト・エリアス (Norbert Elias) [1986] は、地球中心の現実像について、ハンス・ブルーメンベルク (Hans Blumenberg) [1997: 503] は「人間を宇宙の中心的存在と考える我々の思考のどうしようもなさ」について言及している。

風景がさまざまな観察者により特定の仕方、新しいことを常に均一に知覚されていたらどうなるのか。ゲオルク・ジンメルと地理学者のヘルベルト・レーマンは、バラバラに感じ取ったことを統一してつなぎ合わせる力を、風景がおのずと示す特別な気分や雰囲気の中に見た [Simmel 1957: 148-149]。「風景の気分と風景の具体的な統一」はジンメルの見解と同じである [同書: 149]。「風景を見るというプロセスにより現実化されなければならない〈表現の潜在能力〉は、地理学的な自然にその根拠があり、地球表面上のそれぞれの区切りにある程度相応している」とヘルベルト・レーマンはジンメルの哲学的熟考を要約している^{原注2}。

オットー・フリードリヒ・ボルノウは、リールのように風景の表現の潜在能力を観察者の目の中にみる。気分 (ボルノウはここでハイデッガーをふまえている) は、ジンメルとは異なり、哲学的人類学のコンテキストで調査される。その際、気分は常に視覚的体験の精神状態とみなされ、精神的な層であり、心情の状態と見なされる。気分状態が、世界を解釈する際の基本状態を定めている。気分の根底には、常に内在的精神的先例がある。我々の知覚は、常にそれに「調律されて」いる。環境への各反応は、気分の結果である。「私がどういうふうにあるものに取り組むのか、それをどう思ったりするのかは、最初から自分が今ある気分状態によって決定されている。不安

な気分の中には、私を威嚇するようなことがふりかかってきて、明るい気分の時にしか、幸せな体験がひとりでに私にほうに歩み寄って来ることがない [Bollnow 1956]。ヘルベルト・レーマンは風景の表現の潜在能力、そしてボルノウは個人の気分の潜在能力をよりどころにしていた。

歴史的に論証する文化科学の立場から、このことをこのいわば非歴史化された主体・客体相互作用のままにしておくことはないだろう。自然の中でそのつど美しいと思うか不快に感じるか、不安にさせるのか陽気にさせるのか、また刺激的なのか関心を起こさせるのかは、常に「時代の表現形式と伝統 (Zeitstil und Tradition)」 [H. Lehmann 1986: 143] に依存し、すなわち文化発展の特徴に依存している。さらに、この見解を以下のように続ける。これは社会的所与性の結果であり、例えば旅行など具体的な経験の結果、社会的出自や性別や教育の結果、手短に言えば人生史の結果なのである。

風景の評価を問題にした場合、風景に関する個人的な経験には、さまざまな意味のタイプがある。何か特別な事柄に対する印象を持つとすると、常に比較しなければならない。風景の比較は他の比較と同様 [Lehmann 2007: 180頁以下参照]、語りの中心的なテーマである。同じ風景を初めて体験したのか、繰り返し体験したのかが重要である。さらに、風景の中での移動形態も比較の対象になる。ある地域をハイキングするのか、車の窓から知覚するのか、自転車から、それとも列車のコンパートメントから知覚するのか、これらすべてをひっくり返して特殊な印象や霧囲気が伝えられる。それに加えて、風景は、いわば日常史の相互作用の土台になり、さまざまな光の作用や昼時間、季節、雲の形成作用も土台になっており [Hellpach 1977: 177頁以下]、風的作用も土台になっている。ここにさらに聴覚や臭覚から得た印象も加わる。「我々がみた自然が、身動きひとつしなかったことは過去にもなかっただろう」とヴィリー・ヘルパハ (Willy Hellpach) は述べている。風の音も鳥の鳴き声も聞こえない場合、風景の中の完全な静けさには、何かしら不安にさせるものがある。無言の自然は我々には非自然的に思える。

アウトバーンの音、飛行機、機械化された作業装置といった、機械の騒音が影響しだしてからずいぶんと時間が経つ。都市や自然の風景は、特別な匂いだけではなく、特別な音の霧囲気も持っている。これらは、一日のうちに変化し、再三再四突然起こるので「静寂さ」を失う。森の上空を通過している飛行機は、「二番目の (造成された) 自然」のイメージでは、まるで風の音のように受け入れられる。森の中で散歩中に遠くから聞こえてくる電気のごぎりの音が、造成された自然に該当する。

アルプスの隆起ある景色に感動して、今まさに上機嫌の人が、突然、ジェット戦闘機の隊列による飛行訓練の音響効果に出くわすと、著者自身にも起こったことであるが、「山で孤独な気分 (Bergeinsamkeit)」にひたる静かな昼どきから一瞬にして混乱を体験した。同じ風景を次に訪れる時にも、まだこの混乱が「隆起して」余波を残している。

ヴィルヘルム・ハインリヒ・リールは、「各世紀ごと、その100年の世界観だけではなく、自然観も持っていた [Riehl 1873: 57]。すなわち我々は、工業技術の可能性により自然知覚に生じる発展にも考慮しなければならない」と述べている。こんにちではさらに、理想の風景が風景の感情に及ぼすはたらき加わる。GEOといった自然をテーマにした雑誌や旅行パンフレットは、我々に写真を用いて、厳選されたとりわけエキゾチックな風景を紹介する。こういった雑誌や旅行パンフレットは、ロマンティックな郷愁を呼び起こすだけではなく、パターンを形づけることもできる。社会に魅力的なことや文化的に優先されることを知覚しようとし、自分の生活活動範囲を古くさいとか、こせこせしていると見なして、自分から見捨てるという行動パターンが、特に「若者のメンタリティー (Jugendmentalität)」のパターンとして、いたるところで観察される。ハン

ブルクであれロンドンであれ、ハノーファーでも変わらない。風景の知覚に対してどれだけ類似点があるのか調査されなければならない。映画に出てくる都市の景観と自然の風景は、つまりアメリカの娯楽映画にでてくる典型的な風景、例えば古い西部劇映画にでてくるような「大地 (Weites Land)」というタイプは、自然を意識する際に似たようにはたらきかけているかもしれない。何度も放映される「未開発のウェスタン」映画の特殊な風景があきらかに故郷の代償になりうる。それは昔から変わっていない。風景に感動し絶賛するのに、現実は必要なかった。文学的基準や描写された自然だけでも十分だった。

風景の雰囲気を知覚することと風景体験の時代の類型学は、18世紀や19世紀のメルヘンや伝説といった口承の語りの形式に景況を与えただけではない。こんにちに至るまで神話的な風景があり、メルヘンの森あるいは伝説の森が存在する。そして、近代の風景は、完全に違った形で知覚されているので、語りに有利になっている。耕地整理された「トラクターの風景 (Traktorenlandschaften)」[Piepmeier 1980 : 34] や「甜菜の風景 (Zuckerrübenlandschaften)」、 「中間の風景 (Zwischenlandschaften)」 (中部ドイツでかつて褐炭採掘がおこなわれていた場所など) が挙げられる。空間知覚の質と空間経験の想起の質は、言い換えると雰囲気が持続的に変化し始めてから空間の表面だけが変化するに至るまでの風景の変化が、語り研究にとって重要である。これらが、思い出の風景や語りの風景を極めて具体的にしている。

原注

原注1 ヨーロッパの文化史における雲と霧の形成の意義と影響史についてはグルディンを参照すること [Guldin 2006 : 61, 123頁以下]。

原注2 ハイデッガー [Heidegger 1976 : 110頁以下] は、この問題を「空間を先天的なもの」という概念のもとで論じている。

訳注

訳注1 Erzählforschungは、これまで「口承文藝研究」や「説話研究」と訳されていたが、この研究領域は口承文藝や民間説話だけを扱うのではなく、インタビューで聞き取った話や、巷で話題になっている話、ナラティブ、ライフストーリーや戦争の経験談など、ありとあらゆる「人々の語り」を研究対象にした研究分野であるので、訳語を「語り研究」にした。

訳注2 語りの共同体 (Erzählgemeinschaft) とは、近所の人たちや村の住民が何らかの会合などで集まった時にメルヘンや伝説を語りコミュニケーションをはかるグループをさす。グループ内で語られた話をその場にいた人たちが共有するこ

とにより、仲間意識や連帯感が生まれるのが特徴である。

訳注3 語りの生物学 (Biologie des Erzählguts) とは、すでに書き留められた民間伝承に注目するのではなく、現在語られている話とその語り手に注目し、その話がどこで誰に語られ、どのような状況で語られたか等を観察し、話の発展経過や伝播を調べ、語り手の素性、語り方や社会文化的背景にも顧慮した研究である。単に話の起源を探ったり、類話を探したりという研究方法とは異なる。ひとつの話は語り手が変わると語り方も変わり、生物のように変化する。こうして語りを生物ととらえると、生物は形態、作用、歴

- 史性を持っているので、「語りの生物学」といえば、語りの形態、作用、歴史性などの研究という意味になる。
- 訳注4 ErzählforschungとNarratologie(ナラトロジー)はここでは同じ意味で使われている。日本語の「語り」に対応するドイツ語はこれまでErzählungという単語が使われてきたが、最近の傾向としてメディア等でNarrativeという単語が用いられることもよくある。
- 訳注5 クルト・ランケ他編『メルヒェン百科事典』第8巻(ダン・ベン=アモス著、217-237頁)の見出し語「コンテクスト(Kontext)」の224-226頁参照[Ben-Amos 1996]。民俗学的機能理論とはマリノフスキの理論にある文化のコンテクストを指している。文化のコンテクストは話者の知識とそれを表現することは話者の行動規範や信仰や言語のメタファーなどに関係し、民間伝承を知識し解釈する際に枠を与え、他のコンテクストとも囲い込むとされている。
- EMはEnzyklopädie des Märchensの略語。この百科事典を訳者は『メルヒェン百科事典』と訳し、この百科事典プロジェクトについては拙稿参照(金城ハウプトマン朱美「口承文藝研究再考—『メルヒェン百科事典』をもとに」比較民俗学会報 第36巻第3号 通巻第165号 2016年、9-15頁)。本著に出てきたMärchenという単語の訳は、一般に通用している「メルヘン」に統一した。
- 訳注6 メモラート(Memorat)とは、ラテン語のmemorare(思い出す)から派生した単語。個人が体験した普通ではないことを語る。メモラートが語り継がれて伝説になる場合があるので、伝説のカテゴリーのひとつに分類されることもある。
- 訳注7 クルト・ランケ他編『メルヒェン百科事典』第3巻(カール・ジギスメント・クラマー著、674-676頁)の見出し語「モノの意味、モノに宿る精神(Dingbedeutsamkeit, -beseelung)」を参照[Kramer 1981]。
- 訳注8 語り手のマイスター(Meistererzähler)とは、優れた語り手の意味である。デグはメルヘンをうまく語ったり、話のレパートリーを多く持つ人を大工や靴屋など伝統的な職人と同様に手工業者と見なし、手工業者には職級のマイスター(親方)があるので、親方級のメルヘンの語り手を「語り手のマイスター」と名付けたと訳者は解釈する。
- 訳注9 『メルヒェン百科事典』第4巻(315-342頁)の見出し語「語る、語り手」(Erzählen, Erzähler)(リンダ・デグ著、315-342頁)の338頁参照[Dégh 1984, 338]。
- 訳注10 語り研究では長年テキストのみ研究され、コンテクストや語り手の素性等について研究されてこなかった。メルヘンなどが語られた状況について分析することを「状況分析」と呼んでいる。
- 訳注11 『メルヒェン百科事典』第7巻(632-635頁)の見出し語「ヨリンデとヨリンゲル(Jorinde und Joringel)」(ハンス=イェルク・ウター著、632-635頁)の632-634頁参照[Uther 1993, 632頁以下]。
- 訳注12 『メルヒェン百科事典』第9巻(ヘルマン・パウジンガー著、250-274頁)の見出し語「メルヘン(Märchen)」の261頁参照[Bausinger 1999: 261]。
- 訳注13 映画「ブレア・ウィッチ・プロジェクト(The Blair Witch Project)」ダニエル・マイリック、エドゥアルド・サンチェス監督 アメ리카 1999年。映画学科の学生3人が、「ブレア・ウィッチ」伝説についてドキュメンタリー映画を作成しようと、森の中で撮影をおこない、撮影途中で3人も行方不明になり、最終的にビデオのフィルムだけが残った。このフィルムを編集し映画化したのがこの映画だとされている。

参考文献

- Bahrdrdt, Hans Paul (1996): *Grundformen sozialer Situationen*. München.
- Bausinger, Hermann (1958): *Strukturen des alltäglichen Erzählens*. In: Fabula 1, 239-254 (ヘルマン・パウジンガー「世間話の構造」、アラン・ダンデス他/著、荒木博之編訳『フォークロアの理論—歴史地理的方法を超えて』法政大学出版1994年)
- Bausinger, Hermann (1999): Art. „Märchen“. In: Rolf W. Brednich u.a. (Hg.): *Enzyklopädie des Märchens* Band 9. Berlin, 250-274.
- Ben-Amos, Dan (1996): Art. „Kontext“. In: Brednich, Rolf W. u.a. (Hg.): *Enzyklopädie des Märchens*. Band 8. Berlin, 217-

- Bendix, Regina (2005): *Stimme: Eine Spurensuche*. In: Hengartner, Thomas und Brigitta Schmidt-Lauber (Hg.): *Leben – Erzählen. Beiträge zur Erzähl- und Biographieforschung. Festschrift für Albrecht Lehmann*. Berlin, Hamburg, 71-95.
- Beradt, Charlotte (1981): *Das Dritte Reich des Traums*. Frankfurt/M.
- Berendsohn, Walter A. (1968): *Grundformen volkstümlicher Erzählkunst*. Wiesbaden (zuerst 1921). *Das Dritte Reich des Traums*. Frankfurt/M.
- Bernhard, Thomas (1979): *Der Zimmerer*. In: ders.: *Erzählungen*. Frankfurt/M. (「大工」、トーマス・ベルンハルト著、西川賢一訳『ふちなし帽：ベルンハルト短編集』柏書房 2004年収録)
- Blumenberg, Hans (1999a): *Die Vollzähligkeit der Sterne*. Frankfurt/M.
- Blumenberg, Hans (1999b): *Ein mögliches Selbstverständnis*. Frankfurt/M.
- Böhme, Gernot (1995): *Atmosphäre. Essays zur neuen Ästhetik*. Frankfurt/M.
- Bollnow, Otto Friedrich (1956): *Das Wesen der Stimmungen*. 3. Aufl., Frankfurt/M. (O. F. ボルノウ著、藤縄千帥訳『気分の本質』筑摩選書 1973年)
- Bollnow, Otto Friedrich (1976): *Mensch und Raum*. 3. Aufl., Stuttgart u.a. (オットー・フリードリヒ・ボルノウ著、大塚恵一他訳『人間と空間』せりか書房 1994年)
- Brinkmann, Otto (1933): *Das Erzählen in einer Dorfgemeinschaft*. Münster.
- Dégh, Linda (1962): *Märchen, Erzähler und Erzählgemeinschaft*. Berlin.
- Dégh, Linda (1984): Art. „*Erzählen, Erzähler*“. In: Ranke, Kurt u.a. (Hg.): *Enzyklopädie des Märchens*. Band 4. Berlin, 315-342.
- Elias, Norbert (1986) : *Über die Natur*. In: Merkur 40, 469-481.
- Gehlen, Arnold (1977): *Unmensch und Spätkultur. Philosophische Ergebnisse und Aussagen*. 4. Aufl., Frankfurt/M. (アルノルト・ゲーレン著、平野具男訳『原始人と現代文明』思索社 1987年)
- Giddens, Anthony (1995): *Konsequenzen der Moderne*. Frankfurt/M. (アンソニー・ギデンス著、松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か? : モダニティーの帰結』而立書房 1993年。原著 : *The Consequences of Modernity*. Stanford 1990)
- Glassie, Henry (1975): *Folk Housing in Middle Virginia*. Knoxville.
- Glassie, Henry (1999): *Material Culture*. Bloomington.
- Goffmann, Erving (1969): *Wir alle spielen Theater*. München. (E. ゴッフマン著、石黒毅訳『行為と演技 – 日常生活における自己呈示』誠信書房 1989年 : ゴッフマンの社会学1)
- Guldin, Rainer (2006): *Die Sprache des Himmels. Eine Geschichte der Wolken*. Berlin.
- Hartmann, Andreas (1994): *Zungenglück und Gaumenqualen. Geschmackserinnerungen*. München.
- Hauskeller, Michael (1995): *Atmosphären erleben. Philosophische Untersuchungen zur Stimmungswahrnehmung*. Berlin.
- Heidegger, Martin (1976): *Sein und Zeit*. 13. Aufl., Tübingen. (マルティン・ハイデガー著、高木環樹訳『存在と時間』作品社 2013年)
- Heidrich, Hermann (2001): *Von der Ästhetik zur Kontextualität. Sachkulturforschung*. In: Göttisch, Silke und Albrecht Lehmann (Hg.): *Methoden der Volkskunde. Positionen, Quellen, Arbeitsweisen der europäischen Ethnologie*. Berlin, Hamburg, 33-55.
- Hellpach, Willy (1977): *Geopsyché. Die Menschenseele unter dem Einfluß von Wetter und Klima, Boden und Landschaft*. Stuttgart (zuerst 1911). (ヴェイリー・ヘルパッハ著、渡辺徹訳『風土心理学』大日本文明協会 1915年)
- Jaspers, Karl (1971): *Psychologie der Weltanschauungen*. 6. Aufl., Berlin u.a. (カール・ヤスパース著、重田英世訳『世界観の心理学』創文社 1997年)
- Kolesch, Doris und Sybille Krämer (Hg.) (2006): *Stimme. Annäherung an ein Phänomen*. Frankfurt/M.
- (2003): *Auf dem Rücken der Dinge. Materielle Kultur und Kulturwissenschaft*. In: Maase, Kaspar u.a. (Hg.): *Unterwelten der Kultur*. Köln u.a., 95-118.
- König, Gudrun (2003): *Auf dem Rücken der Dinge. Materielle Kultur und Kulturwissenschaft*. In: Maase, Kaspar u.a. (Hg.): *Unterwelten der Kultur*. Köln u.a. 95-118.
- Kovács, Agnes (1967): *Rhythmus und Metrum in den ungarischen Volksmärchen*. In: Fabula 9, 169-243.
- Kramer, Karl-Sigismund (1940): *Die Dingbeseelung in der germanischen Überlieferung*. München.
- Kramer, Karl Sigismund (1981): Art. „*Dingbedeutsamkeit, -beseelung*“. In: Ranke, Kurt u.a. (Hg.): *Enzyklopädie des Märchens*. Band 3. Berlin, 674ff.

- Laistner, Ludwig (1879): *Nebelsagen*. Stuttgart.
- Lehmann, Albrecht (1976): *Das Leben in einem Arbeiterdorf*. Stuttgart.
- Lehmann, Albrecht (1986): *Gefangenschaft und Heimkehr. Deutsche Kriegsgefangene in der Sowjetunion*. München.
- Lehmann, Albrecht (1993): *Im Fremden ungewollt zuhaus. Flüchtlinge und Vertriebene in Westdeutschland 1945-1990*. 2. Aufl. München.
- Lehmann, Albrecht (1999): *Von Menschen und Bäumen. Die Deutschen und ihr Wald*. Reinbek bei Hamburg. (アルブレヒト・レーマン著、識名章喜・大淵友直訳『森のフォークロア：ドイツ人の自然観と森林文化』法政大学出版局 2005年)
- Lehmann, Albrecht (2007): *Reden über Erfahrungen – Kulturwissenschaftliche Bewusstseinsanalyse*. Berlin.
- Lehmann, Herbert (1986): *Essays zur Physiognomie der Landschaft*. Wiesbaden.
- Linton, Ralph (1974): *Gesellschaft, Kultur und Individuum*. Frankfurt/M. (ラルフ・リントン著、小川博訳『人類学の世界史：3本の木』講談社 1995年。原著：Three of Culture. London 1955)
- Mannhardt, Wilhelm (1875/1877): *Wald- und Feldkulte*. Berlin.
- Peuckert, Will-Erich (1965): *Sagen. Geburt und Antwort der mythischen Welt*. Berlin.
- Piepmeyer, Rainer (1980): *Das Ende der ästhetischen Kategorie Landschaft*. In: Westfälische Forschungen 30, 8-46.
- Pöge-Alder, Kathrin (2000): *Erzählerlexikon*. Marburg.
- Ranke, Kurt (1955): *Schwank und Witz als Schwundstufe*. In: Dölker, Helmut (Hg.): *Festschrift für Will-Erich Peuckert, zum 60. Geburtstag dargebracht von Freunden und Schülern*. Berlin, 41-59.
- Riehl, Wilhelm Heinrich (1873): *Das landschaftliche Auge*. In: ders.: *Culturstudien aus drei Jahrhunderten*. 4. Aufl. Stuttgart.
- Schachter, Daniel L. (1999): *Wir sind Erinnerung. Gedächtnis und Persönlichkeit*. Reinbek bei Hamburg. (Schachter, Daniel L.: *Searching for Memory. The Brain, the Mind and the Past*. Basic Books 1996).
- Scharfe, Martin (1995): *Bagatellen. Zu einer Pathognomik der Kultur*. In: Zeitschrift für Volkskunde 91, 1-26.
- Schmidt, Leopold (1952): *Gestaltheiligkeit im bäuerlichen Arbeitsmythos*. Wien.
- Schmidt-Lauber, Brigitta (2003): *Gemütlichkeit. Eine kulturwissenschaftliche Annäherung*. Frankfurt/M.
- Schmitz, Hermann (1969): *System der Philosophie der Gefühle*. Bd. 3, Teil 2: „Der Gefühlsraum“. Bonn.
- Schröder, Hans Joachim (1992): *Die gestohlenen Jahre. Erzählgeschichten und Geschichtenerzählung im Interview: Der Zweite Weltkrieg aus der Sicht ehemaliger Mannschaftssoldaten*. Tübingen.
- Schröder, Hans Joachim (2005): *Topoi autographischen Erzählens*. In: Hengartner, Thomas und Brigitta Schmidt-Lauber (Hg.): *Leben – Erzählen. Beiträge zur Erzähl- und Biographieforschung. Festschrift für Albrecht Lehmann*. Berlin, Hamburg, 17-42.
- Simmel, Georg (1957): *Philosophie der Landschaft*. In: ders.: *Brücke und Tür*. Stuttgart. (『風景の哲学』、ゲオルク・ジンメル著、酒田健一他訳『橋と扉』白水社 2004年)
- Simmel, Georg (1968): *Soziologie*, 5. Aufl., Berlin (zuerst 1908). (ゲオルク・ジンメル著、居安正訳『社会学：社会化の諸形式についての研究』上下巻 白水社 1994年)
- Ströker, Elisabeth (1965): *Philosophische Untersuchungen zum Raum*. Frankfurt/M.
- Tellenbach, Herbert (1968): *Geschmack und Atmosphäre. Medien menschlichen Elementarkontaktes*. Salzburg. (フーベルトウス・テレンバッハ著、宮本忠雄・上田宣子訳『味と雰囲気』みすず書房 1980年)
- Thibaud, Jean-Paul (2003): *Die sinnliche Umwelt von Städten*. In: Hauskeller, Michael (Hg.): *Die Kunst der Wahrnehmung*. Zug (CH), 280-297.
- Uther, Hans-Jörg (1993): Art. *Jorinde und Joringel*. In: Rolf W. Brednich u.a. (Hg.): *Enzyklopädie des Märchens*. Band 7. Berlin, 632-635.
- Weiser-Aall, Lily (1937): *Volkskunde und Psychologie*. Berlin, Leipzig.
- Wiegelmann, Günter (1995): *Theoretische Konzepte der Europäischen Ethnologie*. 2. Aufl., Münster.
- Zender, Matthias (1973): *Volks Erzählungen als Quelle für Lebensverhältnisse vergangener Zeiten*. In: Rheinisches Jahrbuch für Volkskunde 12, 114-169.